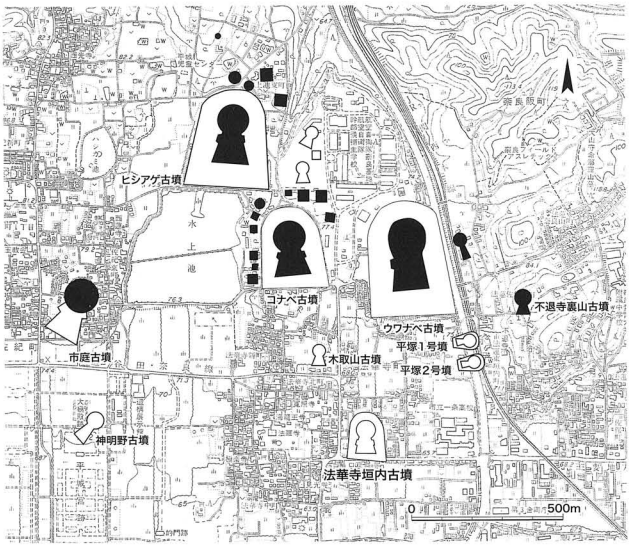

図８　佐紀古墳群（東群）位置図（1/25,000）

円筒埴輪は、川西宏幸氏による円筒埴輪の編年（川西1978）の第Ⅲ期（５世紀前半）にあたると考えるが、近年、鐘方正樹氏や小浜成氏により円筒埴輪編年の再検討も行われており（鐘方1997・小浜2003）、その成果によってもう少し詳しくみておきたい。

法華寺垣内古墳は、所在する位置から考えても佐紀古墳群（東群）を構成する古墳の一つとみてよかろう。この佐紀古墳群から出土している円筒埴輪については鐘方氏による考察があるので、この成果を標べとして比較・検討してみることとする。ただし、氏が示された200ｍを超える大型前方後円墳から出土した埴輪の編年の基準となる様々な指標を、全長100ｍ程度の古墳から出土した埴輪に用いて単純に比較してよいかという問題はあろうかと思われる。しかし、その点に留意しつつも、同じ古墳群内の埴輪ということもあり、時期や地域の点からみてもこれらの埴輪に全くの関連性がないとも思われないので、検討の対象として扱うことは許されると考える。

氏の考察によると、佐紀古墳群（東群）の古墳から出土した円筒埴輪は、コナベ古墳–市庭古墳–ウワナベ古墳–神明野古墳–ヒシアゲ古墳（磐之媛陵古墳）の順に位置づけられる。これらの円筒埴輪にみられる傾向として、時期が下るにつれて突帯間隔および底部高（底面から第一突帯上辺までの高さ）が小さく（低く）なること、また突帯間隔と底部高との間隔についても古い時期の円筒埴輪は底部高が突帯間隔を上回っているが(鐘方分類Ｂ類)、時期が新しくなると両者が近い値を示すようになり（同Ａ類)、次第にＢ類がみられなくなっていくという。また、コナベ古墳、市庭古墳の円筒埴輪には黒斑がみられるが、ウワナベ古墳以降の円筒埴輪には黒斑はみられなくなるようである。

そこで法華寺垣内古墳から出土した円筒埴輪をみると、突帯間隔と底部高の関係については不明であるが、突帯間隔がわかるものは１例だけあり、その数値は11.3㎝である。底部高がわかる資料は２点あり、１点が18㎝、もう１点が13.9㎝である。また、黒斑を有する埴輪片が多くみられる。

以上のような円筒埴輪の特徴から、佐紀古墳群（東群）の円筒埴輪の中に法華寺垣内古墳の円筒埴輪を位置づけようとすると、突帯間隔はコナベ古墳が13㎝前後、市庭古墳は不明で、ウワナベ古墳は11.5～12㎝のものと13.5㎝のものとがみられるようである。底部高はコナベ古墳と市庭古墳に14.5㎝前後のものと16.5㎝前後のものがあり、ウワナベ古墳は12.5～13.0㎝のものと16.5㎝前後のものがみられる。外面の調整をみても、コナベ古墳の円筒埴輪に比べると、法華寺垣内古墳の円筒埴輪は２次調整のヨコハケが省略されたものが多いような印象をうける。また、黒斑の有無の点からはウワナベ古墳の円筒埴輪よりも古い埴輪にみられる特徴をもっているとみることができる。これらのことから勘案すると、法華寺垣内古墳の円筒埴輪はコナベ古墳とウワナベ古墳の間に位置づけることができると考える。

蓋形埴輪については、小栗明彦氏による詳細な検討がある（小栗2007)。小栗氏の分類について詳しく紹介する紙幅はないが、氏の分類から法華寺垣内古墳出土の蓋形埴輪をみてみると、笠部は中位を突帯により分割し（小栗分類Ｘ)、先端は沈線を巡らせている（同Ｌ)。布張り表現は外面の摩滅のためわかりにくいが、無文の可能性が高いと思われる（同Ｄ)。これらのことからＤＸＬ型式にあたると考えられる。立ち飾り部は分類の指標となっている飾り板頂辺や鰭部が出土していないので不明であるが、飾り板の文様は用形文で、中位の横帯が三線帯、上位、下位の横帯が二線帯であることから氏のａ３文様にあたるとみてよかろう。文様や立ち飾りの受け部近くに鰭が付いていない等の部分的な特徴から全形を推定すると、津堂城山古墳（大阪府）から出土した蓋形埴輪に類似するのではないかと思われる。14は同じく用形文であるが、「三線帯や二線帯あるいは単線となった横帯と縦帯が、本来の規則性から逸脱した形で十字に交差する文様である」ｃ１類にあたろう。軸受け部は受け口状である。以上のような文様と立ち飾り部との対応関係から、法華寺垣内古墳出土の蓋形埴輪は、氏の編年の段階設定では２段階もしくは３段階にあてはまると考えられる。これを小浜氏による円筒埴輪編年に対応させると、２段階はⅢ期１段階に、３段階はⅢ期２段階に対応する。小浜氏の

円筒埴輪編年は畿内地域の共通編年を目指し、地域間の併行関係を明らかにしようと試みられたものとみられるが、大和地域のⅢ期１段階の古墳として佐紀石塚山古墳、Ⅲ期２段階の古墳としてコナベ古墳があげられており、これに続くⅣ期１段階ではウワナベ古墳があげられていることから、基本的には鐘方氏の編年を踏まえられたものと考えてよかろう。

上に述べてきたようなことから、法華寺垣内古墳出土の埴輪は、コナベ古墳の埴輪よりは若干下る時期のものとみることができる。古墳の規模も同程度の平塚１号墳（奈良国立文化財研究所 1975）からは有黒斑で、突帯間隔が 12㎝前後、底部高が 14㎝前後の類似した特徴をもつ円筒埴輪が出土しており、これと近い時期に位置づけてよいのではないかと考える。

Ⅴ　おわりに

発掘調査で新たに発見された法華寺垣内古墳とそこから出土した埴輪について、得られた知見や資料の紹介及び編年的位置づけを行った。佐紀古墳群研究の一助となれば幸いである。

最後に、この法華寺垣内古墳に関わる可能性のある資料のことについてふれておわりとしたい。

それは、かつて梅原末治氏によって紹介された法華寺町出土とされる長持形石棺のことである（図９下・梅原 1920）。この石棺は、当時、奈良帝室博物館（現奈良国立博物館）にあったが、現在は神奈川県横浜市にある三渓園に所在する。この石棺が出土した詳細な場所はわからないが、梅原氏による石棺の紹介文によると、「大和国添上郡佐保村大字法華寺一條街道（法華寺を距る東方半町許）に於いて発見せるもの」とある。「一條街道」は調査地のすぐ南を東西にはしる道路（県道谷田・奈良線）のことであり、「東方半町許」とあるので約 50 m程度と考えられ、本調査地と非常に近い場所であることが窺える。この石棺については、近年、土生田純之氏による新たな検討も加えられている（図９上・土生田 1987）。発見された石棺は蓋の一部で、長さ 80㎝以上、幅 135㎝である。短辺には２つの縄掛突起がある。外面は、梅原氏の実測図によれば緩やかなカーブを描く蒲鉾形である（現在は裏返しで置かれており、外面をみることができない）。内面は２段に刳り込まれており、頂部はやや緩やかな台形状を呈している。石材は竜山石とみられている。

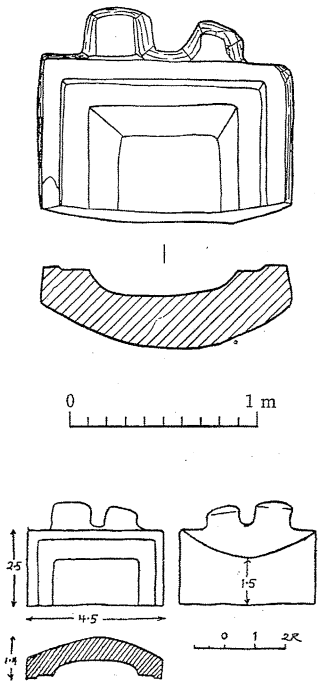

図９　伝法華寺町出土長持形石棺実測図
（土生田 1987 から転載）

この長持形石棺は、その出土地からこれまで平塚古墳やコナベ古墳、ウワナベ古墳に用いられていた石棺の可能性が指摘されていた（町田 1975、土生田 1987）。今回見つかった法華寺垣内古墳とは出土地点が近接することに加え、法華寺垣内古墳は全長 100 mを超える規模と推定され、長持形石棺を埋葬施設として用いている古墳の規模からみても遜色はなく、この長持形石棺が法華寺垣内古墳に用いられていたものであった可能性は十分に考えられよう。

平城京北方の佐紀・佐保の地域では、先ほどあげた平塚１・２号墳の他にも、平城宮跡内でみつかった神明野古墳をはじめ、木取山古墳（奈良国立文化財研究所 1982）やヤイ古墳（奈良市教育委員会 2001）など、平城京の造営に伴い削平されたと考えられる古墳が発掘調査で検出されている[4]。今後もこういった古墳がみつかることは十分想定されることであろう（高木 2008）。今回の新たに古墳を発見したことにより、佐紀古墳群を考える際にはこういった古墳についても留意する必要があることを再認識させられる。それとともに、平城宮・京の範囲に入る全長が 100 mを超えるような前方後円墳をはじめとして、数多くの古墳が削られ、失われていることを考えると、なぜそのような場所に都を造らなければならなかったのか、ということを問われているように思われてならない。そして、各地から多くの人々を徴発して行われた都の造営がいかに大規模な土木工事であったかが容易に想像され、往時に響いていたであろう槌音が聞こえてくるようである。

註

1）石材については、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏に発掘現場で葺石を実見していただき、ご教示をいただいた。

2）墳丘と周濠の復原図は、本調査での成果をコナベ古墳の墳丘と周濠を縮小してそれにあわせたものであって、厳密には異なる点が多々あるものと思われる。

3）調整手法は一瀬 1988 による分類を参考にした。

4）この他、コナベ古墳、ウワナベ古墳の北方にある航空自衛隊幹部候補生学校の敷地内では、前身の西部国民勤労訓練所の建設時の造成の際に多くの古墳が削平されたようで、近年の学校校舎の建替工事に先立つ発掘調査により、従来の古墳の分布図（奈良県史蹟名勝天然記念物調査委員会 1949）や陵墓図（宮内庁書陵部陵墓調査課 1999）に記されて現在は失われてしまった古墳が検出されている（奈良県立橿原考古学考古学研究所「大和 11 ～ 14 号墳」『奈良県遺跡発掘調査　概報　2005 年』他）。

〔参考文献〕

一瀬和夫 1988 「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概報』V　大阪府教育委員会

梅原末治 1920 『久津川古墳研究』

小栗明彦 2007 「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考 I –円筒埴輪を読み解く–』大阪大谷大学博物館報告書第 53 冊　大阪大谷大学博物館

鐘方正樹 1997 「中期古墳の円筒埴輪」『史跡大安寺旧境内 I』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第 1 冊　奈良市教育委員会

川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻 2 号

宮内庁書陵部陵墓調査課 1999 『陵墓地形図集成』宮内庁書陵部陵墓調査課編

小浜　成 2003 「円筒埴輪の観察視点と編年方法–畿内円筒埴輪編年の提示に向けて–」『埴輪論叢』第 4 号　埴輪検討会

齋藤和夫・宇佐晋一 1952 「直弧文の研究（二）」『古代學研究』第 7 号　古代學研究會

高木清生 2008 「佐紀盾列古墳群東群の古墳分布復元試案」菅谷文則編『王権と武器と信仰』

土生田純之 1987 「横浜市三渓園所在の石棺」『文化史論叢』（上）　横田健一先生古稀記念会

町田　章 1975 「古墳」『平城宮発掘調査報告』VI　奈良国立文化座研究所学報第 23 冊　奈良国立文化財研究所

奈良県史蹟名勝天然記念物調査委員会 1949 『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第 4 輯

奈良国立文化財研究所 1975 『平城宮発掘調査報告』VI　奈良国立文化財研究所学報第 23 冊

奈良国立文化財研究所 1982 「平城京左京一条三坊二坪–木取山古墳–の調査（第 131-8 次）」『昭和 56 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

奈良市教育委員会 2001 「ヤイ古墳・平城京左京二条五坊北郊の調査　第 437 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成 11 年度

大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦

原田　憲二郎

Ⅰ　はじめに

大安寺旧境内では昭和55（1980）年から奈良市教育委員会が継続して調査を進めてきたが、平安時代以降の軒瓦については、その報告が断片的である。一方、近年は平安時代以降、特に中世の軒瓦については、続々と研究成果が蓄積されている。そこで本稿では、大安寺出土の平安時代以降の軒瓦を、瓦当の紋様構成から分類、型式番号を付して紹介し、製作年代を比定してみたい。

Ⅱ　大安寺旧境内出土の平安時代以降の軒瓦

奈良市教育委員会による平成12年度の調査までに出土した平安時代以降の軒瓦は軒丸瓦320点、軒平瓦272点である。また、奈良市教育委員会以外で調査され、過去に報告されている資料[1]があり、これらは瓦当紋様から軒丸瓦27型式41種、軒平瓦32型式57種に分類できる[2]。以下に軒丸瓦、軒平瓦の順に紹介する。

軒丸瓦（図1～4）

12型式は蓮弁が桜花状の無子葉単弁蓮華紋。A種がある。紋様は盛り上がりに欠け、平板状である。

13型式は弁央が薬研状に窪む無子葉単弁蓮華紋。A種がある。奈良町遺跡[3]の同笵品から弁数は10弁とわかる。興福寺Ⅵ丸D4[4]、西大寺57A[5]も同笵の可能性が高い。

15型式は弁が楕円形の無子葉単弁蓮華紋。A種がある。中房蓮子が突出する。瓦当下半部側面はヨコケズリ。法隆寺15Aa[6]は同笵である[7]ことから12弁とわかる。

18型式は弁が細い単弁蓮華紋で、いわゆる菊花紋である。B種がある。瓦当外縁は未調整である。

34型式は内区に宝相華紋を配する。A・Bの2種がある。A種は外区内縁に珠紋をめぐらす。薬師寺86[8]、興福寺Ⅵ丸J1、法成寺例[9]は同笵[10]。平等院NM043[11]も同笵の可能性が高い。B種は外区素紋。薬師寺87、平等院NM042、唐招提寺例[12]は同笵の可能性が高い。

36型式は間弁が棍棒状の複弁蓮華紋。A種がある。法隆寺36Cbは同笵の可能性が高く、本例も8弁とおもわれる。外縁は直立縁である。外縁は未調整で離れ砂が付着する。凸面瓦当付近は粗いタテケズリを施す。

39型式は復古的な紋様構成の複弁8弁蓮華紋。A種がある。蓮弁は、ほぼ平坦だが、子葉と弁端はやや隆起する。瓦当裏面下半部は縦方向のユビナデで調整。薬師寺39、西大寺72A、唐招提寺例[13]は同笵の可能性が高い。

41型式は蓮子が中房中央に無い複弁6弁蓮華紋。A種がある。突出した中房に4＋8の蓮子を配する。

45型式は外区外側の圏線が無い複弁蓮華紋。A種がある。間弁は独立せず、つながって蓮弁の周りをめぐる。薬師寺45、西大寺74Aは同笵の可能性が高い。

46型式は中房中央の蓮子とその周囲の蓮子との間に圏線をめぐらせる複弁蓮華紋。A種がある。間弁は圏線に取り付く。法隆寺50Aは同笵の可能性が高い。

51型式はハート形の子葉をもつ複弁8弁蓮華紋。A種がある。51Aはすでに改笵資料があることが指摘されていた[14]が、今回の資料観察で、3回の彫り直しが確認でき、彫り直し前をAa、彫り直し後の古いものから順にAb・Ac・Adとする。51Abは、外区外圏線を彫り直し、内圏線より高くする。蓮子を高く大きく彫り直す。中房圏線内側を彫り込み、中房圏線が太く高く、中房内径が狭くなる。笵型の磨耗の為、子葉は不鮮明となり、無子葉単弁蓮華紋にみえる。51Acは、蓮弁を彫り直して高くし、子葉および間弁が完全に無くなる。中房蓮子を再度彫り直し、高く大きくしたことで、中心蓮子と周囲の蓮子が接合する。中房圏線も高く彫り直す。51Adになると、中房以外はすべて彫り直す。蓮弁は、当初の面影も無く、球形の無子葉単弁となっている。内外圏線も彫り直しされ、同じ高さとなり、太くなる。内外圏線間の珠紋も彫り直しされ、内外圏線と珠紋が接合し、輻線紋にみえる。造瓦技法に関しては、各段階ともほぼ同じである。瓦当裏面への丸瓦接合に際しては、強めのユビナデにより接合溝を設け、丸瓦を接合する。瓦当裏面はナデにより平坦に仕上げ、瓦当裏面接合部の形状は半円形である。凸面瓦当付近はタテケズリ。瓦当厚に関してはAd段階が、他の段階資料に比して2倍近く厚い。51Aaは東三坊大路東側溝[15]で、51Abは奈良町遺跡[16]で同笵品が出土。櫟本廃寺例[17]は51Adと同笵の可能性が高い。なお、51Aは平安時代以降の軒丸瓦では、最も出土量が多く85点ある。内訳は、Aa7点、Ab38点、Ac9点、Ad3点、A種とまで判るもの28点である。

55型式は中房周りに雄蕊帯がある複弁蓮華紋。A種がある。8弁である。瓦当裏面丸瓦接合部に強めのユビナデで接合溝を設け、丸瓦を接合する。外縁は未調整。興福寺Ⅵ丸E5、唐招提寺例[18]は同笵の可能性が高い。

60型式は中房内に右巻き[19]の二巴紋を配した複弁蓮華紋。A・Bの2種がある。A種は6弁。間弁の一部に半

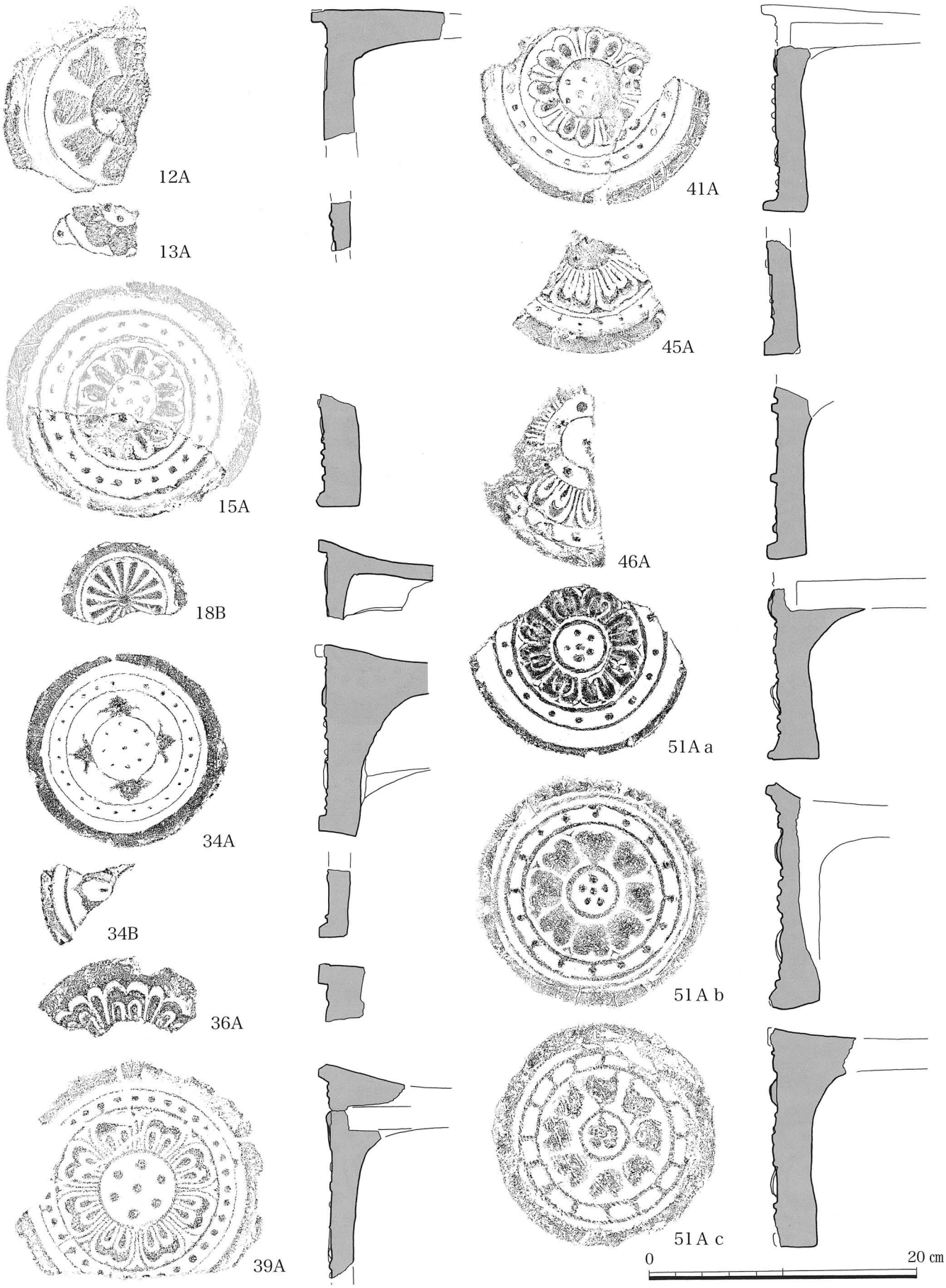

図1　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒丸瓦　①（1/4，15 A薄拓本は法隆寺蔵品）

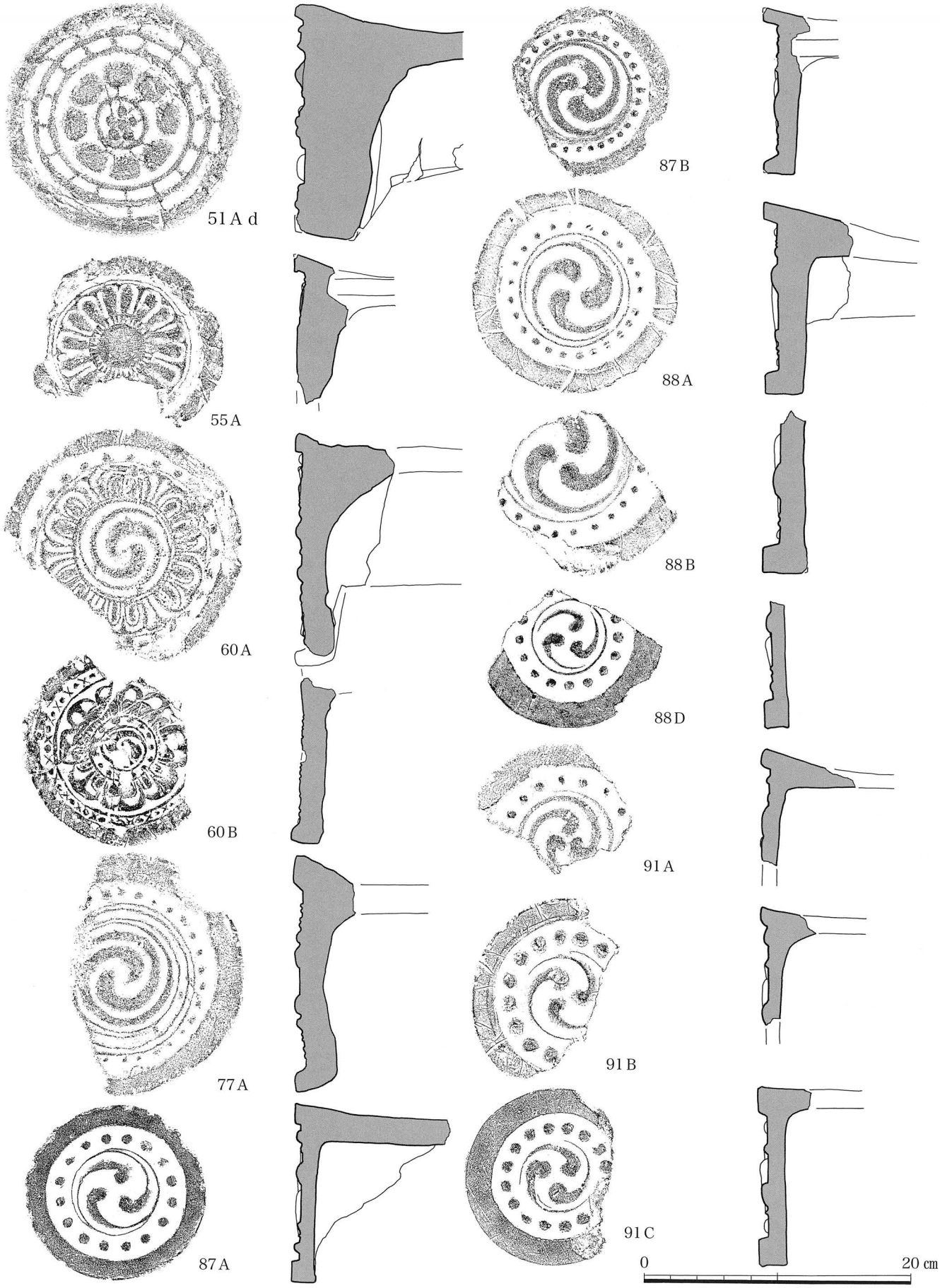

図２　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒丸瓦　②（1/4）

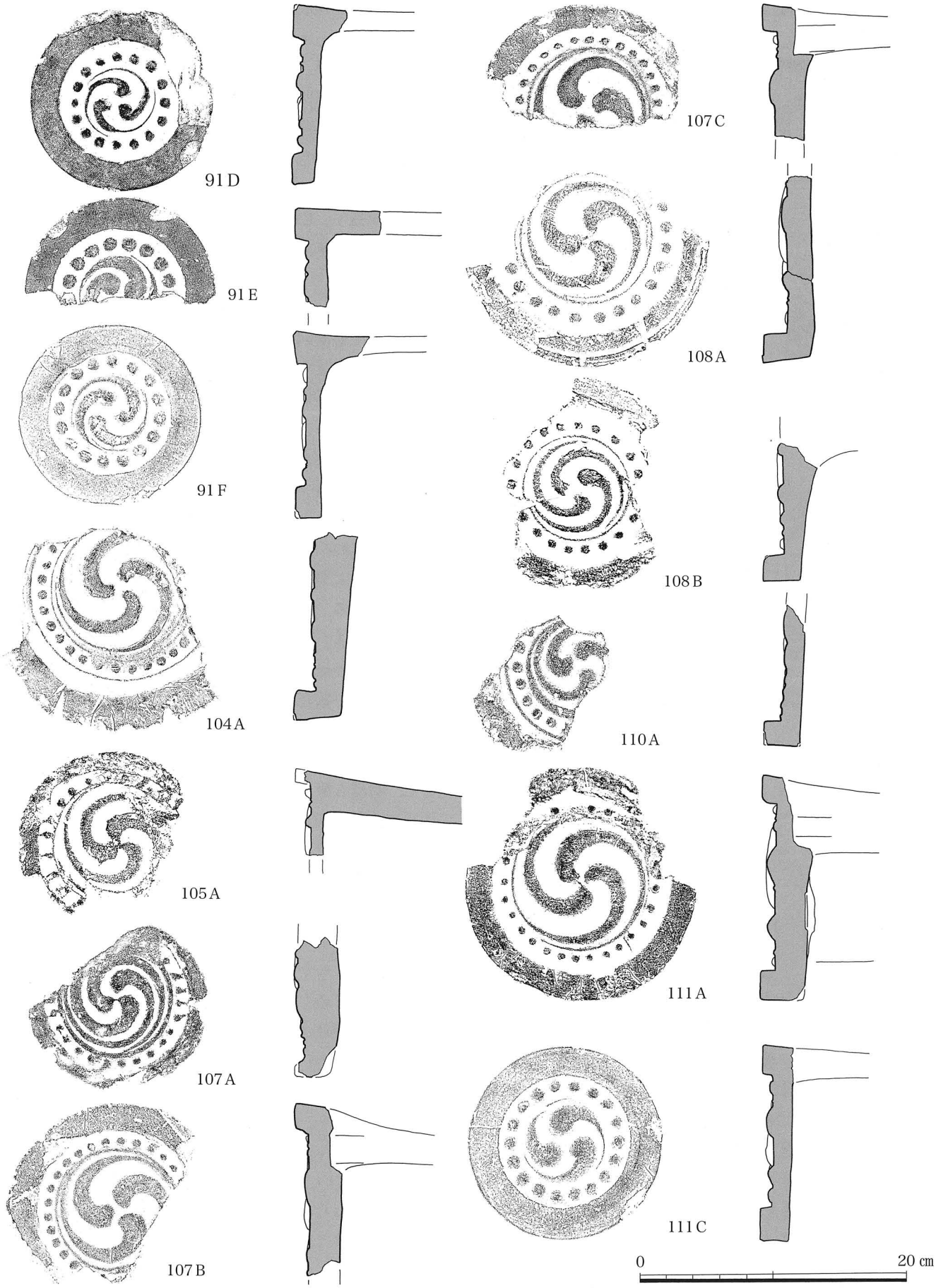

図3　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒丸瓦　③（1/4）

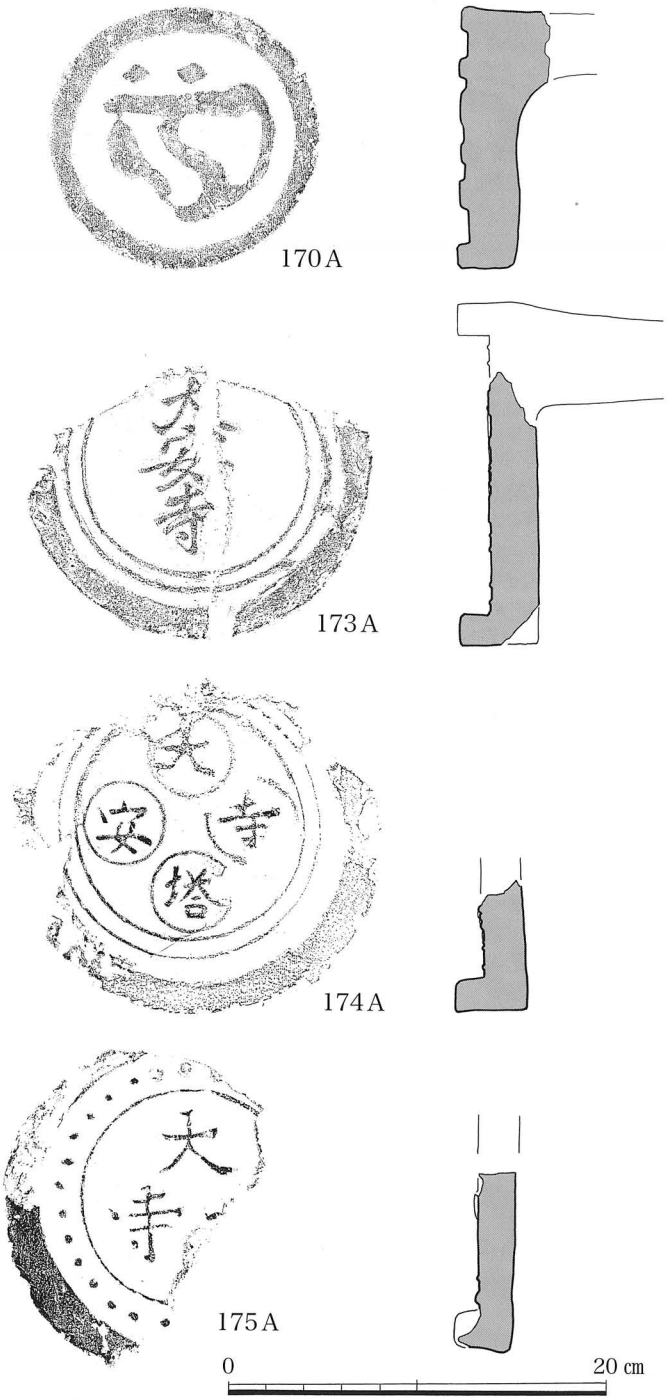

図4　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒丸瓦④（1/4）

分隠れた子葉を表現する。凸面瓦当付近は縦方向に粗くユビでナデツケ、接合部から瓦当下辺にかけてユビで粗いナデツケを施す。B種は中房巴紋の外側に珠紋をめぐらし、その外側に8弁蓮華紋を配する。瓦当下半部側面はヨコケズリ。長谷寺出土品は同笵で、笵傷進行から大安寺60Bに先行する[20]。興福寺例[21]は同笵の可能性が高い。

77型式は左巻きの二巴紋。A種がある。巴の尾は長く圏線状にめぐる。巴紋の外側には圏線をめぐらす。観察しえた調整等の造瓦技法は60Aと同じである。

87型式は左巻きの三巴紋で、巴の頭同士は分離し、尾は内圏線に接続する。外圏線は無く、外区は珠紋。A・B2種がある。A種は巴紋の尾部が細い。瓦当面にキラコが確認できる。外縁はナデを施す。B種はA種に比べ巴頭部が尖り気味で、巴の頭同士も近い。外縁は未調整。

88型式は左巻きの三巴紋で、巴の頭同士は分離し、尾は内圏線につかない。外圏線は無く、内圏線の外側に珠紋をめぐらす。A・B・Dの3種がある。A種は巴の頭同士が近く、巴の頭は円形で、巴紋の断面は半球状である。外縁は未調整である。凸面瓦当付近はタテナデ調整。瓦当裏面は接合部に沿ってナデまわす。瓦当裏面下半部側面および瓦当裏面下半部はヨコナデで調整する。春日東塔南回廊・三面築地塀例[22]は同笵の可能性が高い。B種は復原すると、88型式の中で直径が最も大きい。観察しえた調整等の造瓦技法はA種と同じである。D種は巴紋が小振り。巴の頭は大振りの円頭で、断面は高い半球状、巴の尾が短いオタマジャクシ形である。瓦当面にキラコが付着する。外縁はナデを施し、平滑に仕上げる。外縁端部はヨコケズリで幅5㎜程度の面取りを行う。

91型式は左巻きの三巴紋で、内外ともに圏線は無く、巴紋の外側に珠紋をめぐらす。A・B・C・D・E・Fの6種がある。A種は巴の頭部は小さく尖り気味で、カギ状に曲がる。巴の頭同士は互いに近く、中央はやや盛り上がる。外縁は未調整。B種は巴の胴部が細い。瓦当面にキラコが確認できる。外縁はヨコナデ。C種は巴紋の径が小さい。D種はC種に似るが、C種に比べて巴の頭同士が近い。E種は91型式の中で、巴の頭が最も大きく、胴部も最も幅広い。F種はD種に似るが、D種に比べて、巴の胴部幅が広い。C～F種は巴がオタマジャクシ形である点、瓦当面にキラコが付着する点、外縁に丁寧なヨコナデを施して平滑に仕上げる点、外縁端部にヨコケズリで幅3㎜程度の面取りを行う点が共通する。

104型式は右巻きの三巴紋で、巴の頭同士は分離し、尾は内圏線につかない。内圏線と外圏線があり、外区内縁には珠紋をめぐらす。A種がある。巴の頭同士が互いに近い。巴頭部は尖り気味、巴紋はやや高く丸みをおびる。内圏線に比して外圏線は太く高い。外縁は未調整。

105型式は右巻きの三巴紋で、巴同士の頭部は接し、尾は圏線につく。内圏線のみある。内圏線の外側に珠紋をめぐらす。A種がある。巴頭部が尖る。巴紋は丸みを帯び、やや高い。珠紋帯には笵傷が確認できる。

107型式は右巻きの三巴紋で、巴同士の頭部は分離する。尾は圏線につき、内圏線のみある。内圏線の外側には珠紋をめぐらす。A・B・Cの3種がある。A種は巴の頭同士が互いに近い。巴頭部は尖り気味である。巴紋

はやや高く丸みをもつ。B種はA種より巴紋が大きい。C種はB種に似るが巴の頭同士はB種より離れる。B・C種は巴頭部が円形に近い点、巴紋はやや高く丸みを持つ点、外縁が未調整である点が同じである。

108型式は右巻きの三巴紋で、巴同士の頭部は分離する。尾は圏線につかない。内圏線のみある。内圏線の外側に珠紋をめぐらす。A・Bの2種がある。A種は巴頭部がわずかに尖る。巴の頭同士は互いに近く、笵傷の為、接続しているようにみえる箇所がある。巴紋はやや高く丸みを帯びる。外縁は未調整。B種はA種に比して巴紋が小さい。巴頭部は、2つが尖り気味で1つは円形に近い。巴紋はやや高く丸みをもつ。外縁は未調整である。

110型式は右巻きの三巴紋で、巴の頭同士は分離し、尾は圏線上に巡る。外圏線のみある。外区内縁は珠紋。A種がある。巴の頭同士が互いに近い。巴紋はやや高く丸みをもつ。巴頭部は尖り気味である。外縁は未調整。

111型式は右巻きの三巴紋で、巴同士の頭部は分離する。内外ともに圏線は無い。巴紋の外側には珠紋。A・Cの2種がある。A種は瓦当中央にコンパス針痕が確認できる。巴の頭同士は互いに近い。巴頭部は尖り気味である。巴の尾は長く圏線上にめぐる。外縁未調整。C種はA種に比べ巴紋の径が小さい。巴はオタマジャクシ形。瓦当面にキラコが付着する。外縁は丁寧なヨコナデを施す。外縁端部はヨコケズリで幅約3㎜の面取りを行う。

170型式は内区に文字をあらわした文字紋である。A種がある。内区に胎蔵界大日如来を表す梵字（アーク）の1字をあらわす。法勝寺例[23]は同笵の可能性が高い。

173型式は内区に文字をあらわし、内区と外区を圏線で分かつ。A種がある。内区に「大安寺」の3字を縦書きする。瓦当裏面に指で浅い溝を掘り、先端未加工の丸瓦を接合する。瓦当裏面はヨコナデで平坦に仕上げる。瓦当下半部側面はヨコナデを施す。外縁は未調整である。

174型式は内区に文字をあらわし、各文字を圏線で囲み、さらに内区と外区を圏線で分かつ。A種がある。内区に「大安寺塔」の文字を配する。観察しえた調整等の造瓦技法は173Aと同じ。法隆寺74Aは同笵[24]である。

175型式は内区に文字をあらわし、内区と外区は圏線で分かち、外区内縁には珠紋をめぐらす。A種がある。文字は上に「大」を、その左下に「寺」を配しており、右下には「安」を配するとみられる。観察しえた調整等の造瓦技法は173A・174Aと同じである。

軒平瓦（図5～8）

202型式は内区中央部に連珠紋を、その両端に×や＊紋を飾る幾何学紋。A種がある。瓦当上縁に面取り行う。顎貼り付け技法。顎部は横方向のナデを、瓦当裏面はタテケズリを施す。顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕が残る。浦坊廃寺例[25]、西安寺例[26]は同笵の可能性が高い。

203型式は剣頭紋を内区に飾る幾何学紋。A種がある。内区上部に圏線をめぐらした連珠紋を、内区下部に下向きの剣頭紋を配する。粘土板を重ねて成形する。薬師寺293、法隆寺例[27]、額安寺例[28]は同笵の可能性が高い。

205型式は連珠紋を内区に飾る。A・Bの2種がある。A種は内区と脇区を分ける界線が無い。顎裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法[29]。顎接合部側縁付近に凹型台圧痕。瓦当上縁に面取り。顎面はヨコナデ、顎部瓦当裏面はタテケズリのちヨコナデ。B種は小型品。観察しえた調整等の造瓦技法は205Aと同じである。

215型式は波状に上下する唐草紋を展開させ、その間に珠紋を配す紋様を内区に飾る。A種がある。粘土板を重ねて成形する。凸面はタテケズリの後、丁寧なタテナデを施す。元興寺例[30]・興福寺例[31]は同笵の可能性が高い。

220型式は右から左へと偏行する唐草紋を飾る。A種がある。6回反転である。A種には外区と右脇区を切り詰めた資料があり、改笵前をAa、改笵後をAbとする。Aa種は顎貼り付け技法。瓦当上縁にヨコケズリによる面取りを施す。Aa種は興福寺例[32]と同笵の可能性が高い。Ab種は法成寺例[33]と同笵である[34]。

222型式は左半の唐草が左から右へと反転し、右半の唐草が右から左へと反転する。A種がある。左半部が5回反転で、右半部の反転数は、同笵の可能性が高い薬師寺332、法隆寺230A、仁和寺例[35]から6回反転とわかる。なお、奈良町遺跡出土例[36]も同笵の可能性が高い。顎接合部に凹型台の痕跡が残る。瓦当上縁をヨコケズリにより面取りする。顎部・瓦当裏面はヨコナデを施す。

229型式は変形忍冬唐草紋。A種がある。平城京6644型式に似ており復古調であろう。瓦当上縁はヨコヘラケズリにより面取りを施す。凸面顎付近はタテヘラケズリを施す。紋様構成から薬師寺249は同笵の可能性がある。

231型式は双頭渦紋を中心飾りとする均整唐草紋。A・Bの2種がある。A種は主葉上下に、小さな支葉を配する。平瓦部凸面はタテケズリで顎段部を削り出し、のちヨコナデで、浅い段顎に調整する。凹面は瓦当付近にヨコケズリを施す。B種は中心飾りが小さい。凸面は顎部付近に斜め縄叩き痕跡を残し、平瓦部に縦位の縄叩き目を残す。横井廃寺ＹＫＨ－11は同笵[37]である。

232型式は3回反転均整唐草紋で主葉が連続し、支葉が長く伸びる。A種がある。凸面は顎部に顎用粘土を貼り付け、タテケズリ。紋様構成から、対葉花紋の中心飾

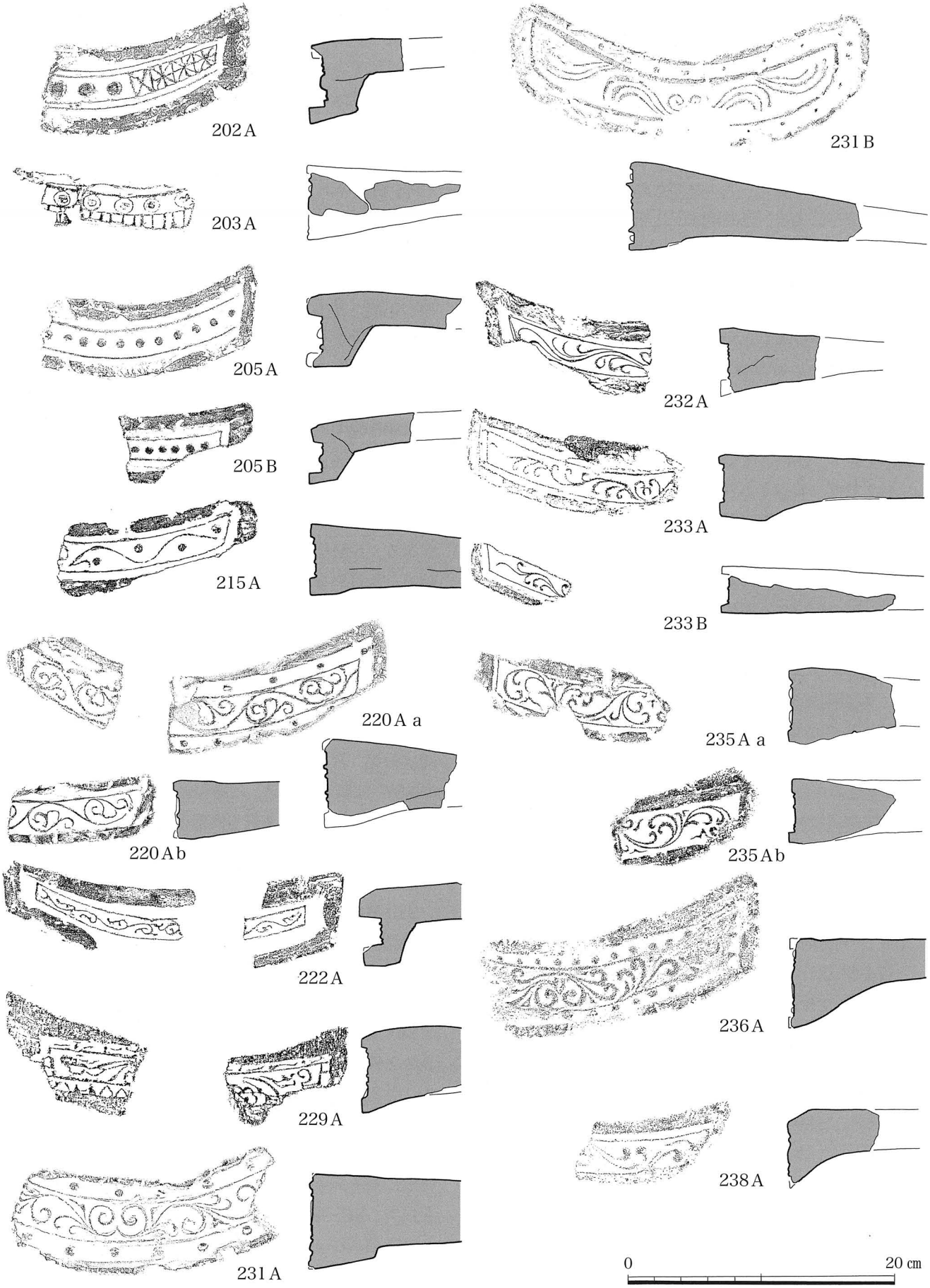

図5　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒平瓦　①（1/4）

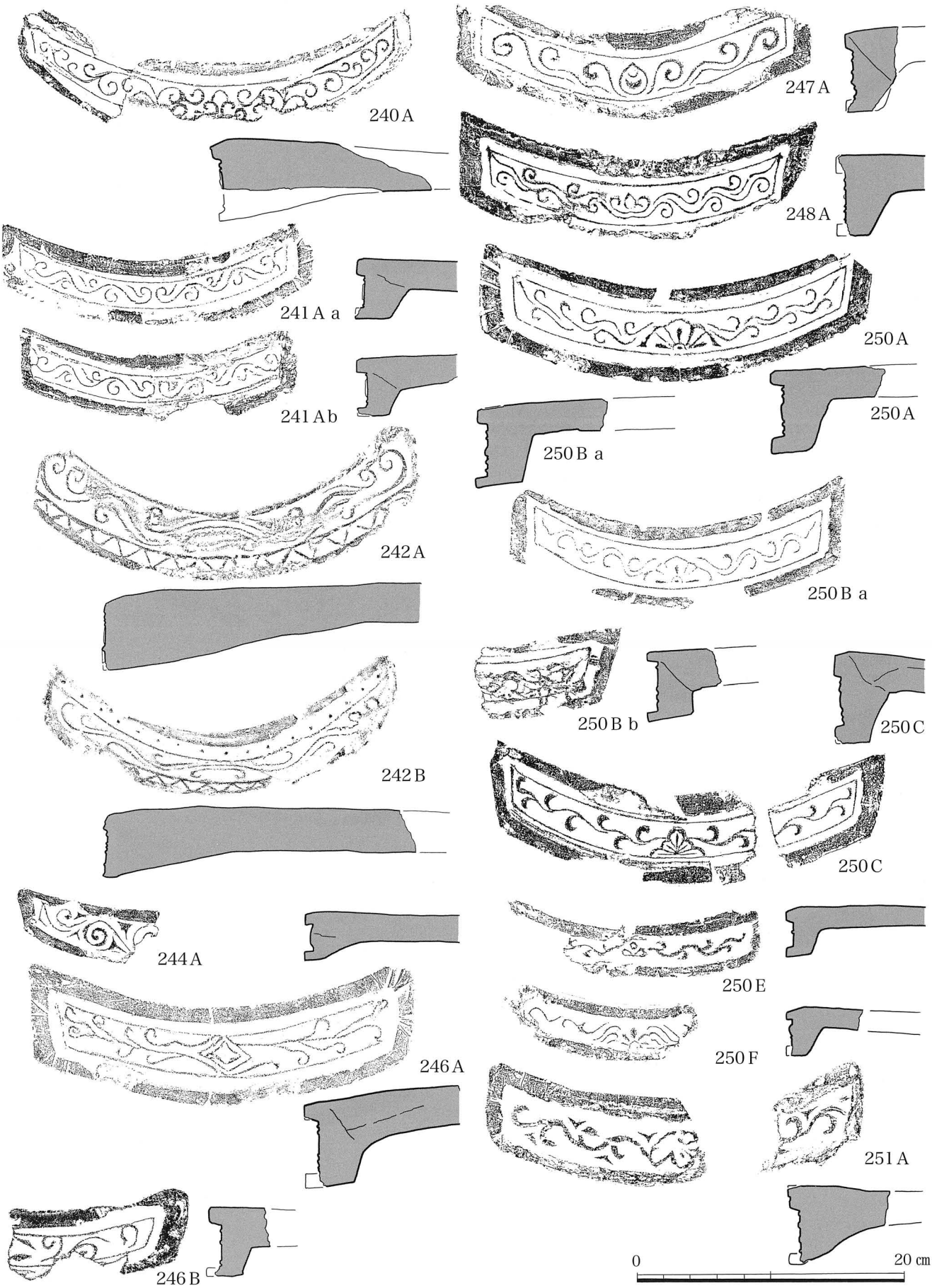

図6　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒平瓦　②（1/4）

図7　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒平瓦　③（1/4，254 A薄拓本は西大寺出土品で、奈文研蔵）

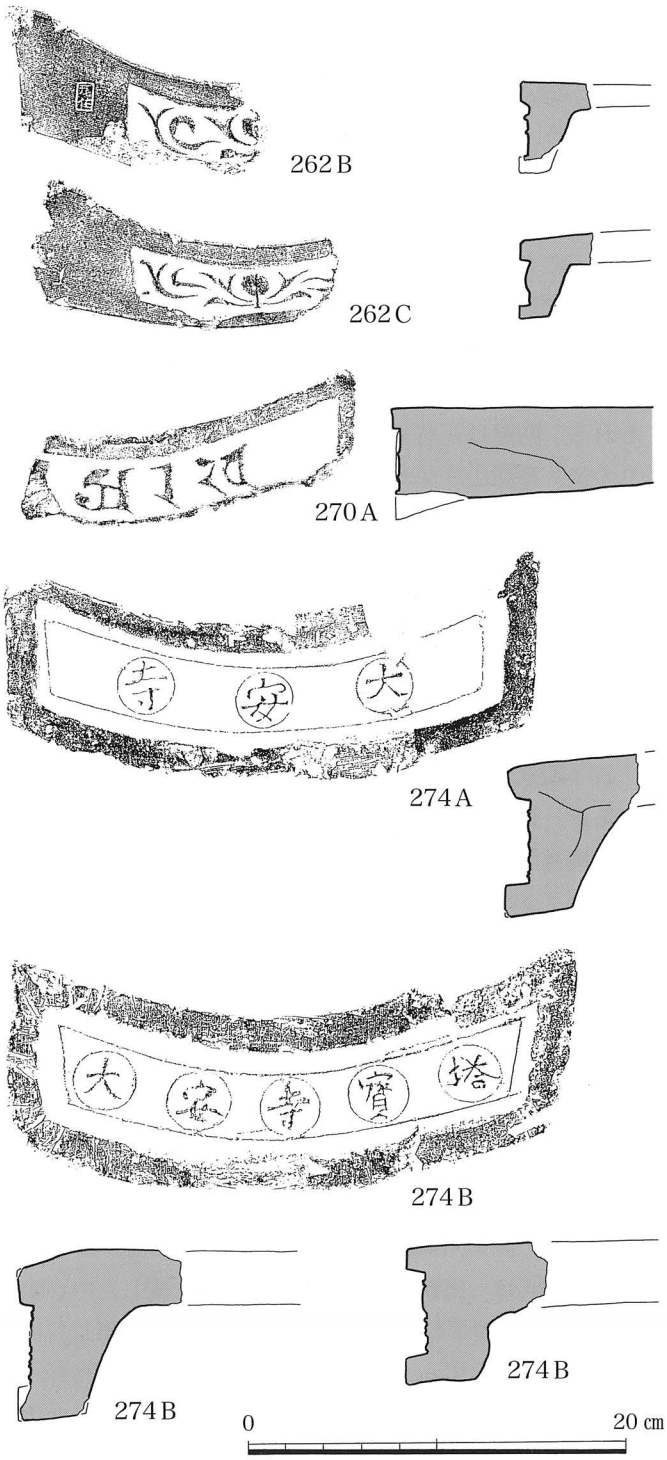

図8　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒平瓦④（1/4）

りを持つ薬師寺250の左部分の可能性が考えられる。

233型式は中心部分逆U字形を対葉花紋で囲んだ中心飾りを配し、主葉が連続する4回反転均整唐草紋。A・Bの2種がある。A種は顎用粘土を貼り付けた顎貼り付け技法である。B種は233型式の小型品とみられる。凸面には縦位の縄叩き目が残る。薬師寺259は同笵の可能性が高く、同笵であれば4回反転均整唐草紋とわかる。

235型式はT字形を対葉形が囲む中心飾りをもつ均整唐草紋。A種がある。3回反転である。外区を切り詰めた改笵資料があり、改笵前をAa、改笵後をAbとする。Aa種は興福寺VI平E1、東大寺360A[38]と、Ab種は平安宮例[39]、興福寺例[40]とそれぞれ同笵の可能性が高い。

236型式はU字形を対葉形が囲む中心飾りをもつ均整唐草紋。A種がある。3回反転である。顎は糸切りした粘土板に顎用粘土を接合し、のち瓦当側から平瓦部の方向にナデツケを施して成形する顎貼り付け技法である。

238型式は中心にY字形を配し、その左右に下向きの対葉形をおき、2回反転する均整唐草紋。A種がある。A種は右半部破片だが、薬師寺269、興福寺VI平C1、西大寺276B、唐招提寺例[41]、平等院NH023は同笵の可能性が高い。瓦当上縁をヨコケズリし面取りする。

240型式は対向させた唐草紋の上に逆U形を配した中心飾りをもつ均整唐草紋。A種がある。顎貼り付け技法。凸面はタテケズリのちタテナデを施す。瓦当上縁はヨコケズリで面取りする。平等院NH018は同笵の可能性が高い。240Aの笵型の界線を太く彫り直し、外縁とした改笵資料が、薬師寺例[42]、興福寺VI平D8である[43]。

241型式は対向させた唐草を中心におく均整唐草紋。A種がある。左右の主葉は連続するが、支葉は分離する。笵の両端を切り縮めた改笵資料があり、改笵前をAa、改笵後をAbとする。出土点数の内訳は、Aa5点、Ab2点、A種とだけ判るもの8点である。Aa・Ab種ともに観察しえた調整等の造瓦技法は同じである。瓦当貼り付け技法である。瓦当上縁はヨコケズリで面取りを行う。顎面・瓦当裏面はヨコナデを施す。顎接合部には凹型台の圧痕がある。Ab種は西大寺327A、宮町遺跡例[44]と同笵で、大安寺ではAa・Ab両者とも出土していることから、改笵後もしばらく大安寺へ供給した後、西大寺・宮町遺跡へ供給されたと考えることができる。なお、秋篠寺例[45]もAb種と同笵の可能性が高い。

242型式は中央下方に下向きの唐草紋をおき、この上に、主葉が連続して流れる均整唐草紋を飾る。A・Bの2種がある。A種は大型。下外区は線鋸歯紋、上外区・脇区は切り詰められている。凹面瓦当付近をヨコケズリ。凸面はタテケズリの後タテナデ。B種は小型。上外区は珠紋、下外区は線鋸歯紋。観察しえた調整等の造瓦技法は242Aと同じ。薬師寺246、西大寺270Aは同笵。古市廃寺例[46]、横井廃寺YKH－12は同笵の可能性が高い。

244型式は渦状の唐草紋。A種がある。主葉間に楔形の支葉を配する。瓦当上縁には面取りを施す。顎貼り付け技法である。顎部・凸面平瓦部はタテケズリを施す。

246型式は菱形を中心飾りとする均整唐草紋。A・B

の２種がある。Ａ種は唐草の主葉が連続する。瓦当貼り付け技法である。瓦当上縁にヨコヘラケズリによる面取りを行う。顎接合部には凹型台の圧痕が残る。尾道浄土寺例は同笵[47]である。Ｂ種は唐草が連続しない。３回反転。瓦当外縁はナデにより調整され、瓦当上縁はヨコケズリにより面取りを行う。瓦当貼り付け技法。瓦当裏面はヨコナデ。顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕がのこる。

247 型式は宝珠形を中心飾りとする均整唐草紋。Ａ種がある。３回反転。瓦当外縁はヨコナデにより調整。瓦当貼り付け技法。瓦当裏面はヨコナデ。顎接合部には凹型台の圧痕がある。元興寺32[48]は同笵の可能性が高い。

248 型式は水滴形を中心葉が囲む中心飾りをもつ均整唐草紋。Ａ種がある。５回反転。瓦当上縁はヨコケズリし、面取りを行う。瓦当貼り付け技法。顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕がある。元興寺例[49]は同笵で、右端に笵傷が認められるのに対し、大安寺248 Ａには無いことから、大安寺供給後、元興寺に供給されたとわかる。

250 型式は半截花紋を中心飾りとする均整唐草紋。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｆの５種がある。Ａ種は３弁半截花紋が中心飾り。唐草は分離し、６回反転。瓦当上縁をヨコヘラケズリし面取りを行う。瓦当貼り付け技法。顎後縁に面取りを施すものと施さないものがある。顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕がある。西大寺343 Ａ、興福寺Ｘ平Ｃ１は同笵の可能性が高い[50]。Ｂ種は３弁半截花紋が中心飾りで、Ａ種の小型品。唐草は分離し、５回反転。瓦当貼り付け技法。Ｂ種には紋様をトレースするように彫り直し、右第３単位支葉を彫り加えたものがあり、改笵前をＢａ、改笵後をＢｂとした。Ｂａには凸面顎段部調整はヨコナデするものと、タテナデするものがある。顎後縁の面取りに関しても、有るものと無いものがある。顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕。西大寺343 Ｂ、宮町遺跡例[51]は同笵で胎土も同じである[52]。春日東塔南回廊・三面築地塀例[53]、薗光寺例[54]は同笵の可能性が高い。Ｂｂは凸面顎段部調整がヨコナデ調整である。顎後縁の面取りを行う。Ｃ種は中心飾りが５弁半截花紋。唐草の主葉は連続し、７回反転。瓦当上縁をヨコケズリし面取りを行う。瓦当貼り付け技法。顎面・顎部瓦当裏面をヨコナデ調整する。顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕がある。尾道浄土寺例は同笵[55]。Ｅ種は３弁半截花紋が中心飾り。唐草は連続し５回反転。瓦当貼り付け技法。凹面は瓦当上縁と側縁付近にヘラケズリを施す。顎面、顎部瓦当裏面はヨコナデ調整を行う。顎接合部に凹型台の圧痕がある。Ｆ種は中心飾りが５弁半截花紋。中心飾り左右に水波紋を配し、その外側に唐草紋を展開する。瓦当上縁、顎部後縁を面取りする。顎面・顎部瓦当裏面・凸面平瓦部はヨコナデ。中心飾りとその右側の水波紋間および、左第１・２単位唐草間に笵傷が確認できる。法隆寺272 Ｊは笵傷も一致し、同笵であろう。ただし、左唐草第３単位が法隆寺272 Ｊでは巻き込まず、大安寺250 Ｆでは巻き込んでいる。したがって、法隆寺272 Ｊの左第３単位唐草を巻き込むように彫り加えたものが大安寺250 Ｆとみることができ、大安寺250 Ｆが後出の可能性がある。

251 型式は宝相華紋を中心飾りとする均整唐草紋。Ａ種がある。左単位が４回反転、右単位は３回反転とおもわれる。凹面は瓦当付近をヨコケズリ。凸面はタテケズリの後、顎部にヨコナデ。顎貼り付け技法。興福寺Ⅶ平Ａ11、薬師寺281、西大寺286 Ａは同笵の可能性が高い。

252 型式は逆Ｖ字形を中心飾りとする均整唐草紋。Ａ種がある。左単位は６回反転。顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕を残す。顎部瓦当裏面はタテケズリのちヨコナデを施す。東福寺63[56]、姫路市松原八幡神社例[57]、京都栢杜遺跡例[58]、上清滝遺跡例[59]は同笵の可能性が高い。

253 型式は３葉紋を中心飾りとする均整唐草紋。Ａ種がある。瓦当外区全体を削り、瓦当上縁を面取りする。平瓦接合面にカキメを施した顎貼り付け技法である。顎後縁はヨコケズリにより面取りを行う。顎面、顎部瓦当裏面はヨコナデを施す。瓦当面にキラコが確認できる。

254 型式は中心に横視した蓮華紋をおく均整唐草紋。Ａ・Ｂの２種がある。Ａ種は５回反転。凸面顎面・顎部瓦当裏面はヨコナデ。瓦当貼り付け技法。顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕。西大寺350 Ａは同笵[60]、比蘇寺例[61]は同笵の可能性が高い。Ｂ種は３回反転。瓦当上縁・下縁に面取りを行う。凸面はタテケズリした後に、顎部をヨコナデ。顎接合部側縁付近には凹型台の圧痕が残る。

258 型式は一葉紋の左右に２本の支葉を配した中心飾りをもつ均整唐草紋。Ａ種がある。中心飾り上部左右に長めの支葉を配する。唐草は連続し３回反転。瓦当外区全体を削る。平瓦接合面にカキメを施した顎貼り付け技法である。顎面、顎部瓦当裏面はヨコナデを施すが、特に顎段部には強めのユビナデを施す。Ａ種には中心飾りおよび、その左上部の支葉をトレースするように太く彫り直したものがあり、彫りなおし前をＡａ種、彫りなおし後をＡｂ種とした。Ａｂ種は左端が鎌形の軒桟瓦である。Ａａ・Ａｂ種ともに瓦当面にはキラコが確認できる。

259 型式は３叉の花弁の下、左右に各々２叉の１葉をおく中心飾りをもつ均整唐草紋。Ａ種がある。唐草が連続し、２回反転。瓦当外区全体を削る。顎面、顎部瓦当裏面はヨコナデを施す。瓦当面にキラコが確認できる。左

端が鎌形の軒桟瓦である。正暦寺130Aは同笵である。[62]

260型式は3叉の花弁を持つ橘唐草紋。A～Jの10種がある。A種は唐草が第2単位までしか無い。B種は花弁基部が楕円形で、花弁に接続。C種は第3単位唐草が2叉にならない。D種は下部第1単位唐草が長い。E種は唐草が花弁下部から連続する。F種は上部第1単位の唐草が大きく屈曲し、唐草は花弁下部から連続する。G種は紋様構成がF種に似るが、やや小型。H種は第1単位と第2単位との唐草の間隔が広い。I種は第2単位唐草が260型式の中で最も大きい。J種は花弁が260型式の中で最も大きい。これら10種は外縁に丁寧なヨコナデを施し、平滑に仕上げる点、外縁端部はヨコケズリで幅3～5㎜の面取りを行う点、平瓦接合面にカキメを施した顎貼り付け技法である点、で造瓦技法が同じである。

261型式は花弁が球状を呈する橘唐草紋。A・B・C・Dの4種がある。A種は両端の唐草が太い。B種は下部第1単位の唐草が2叉。C種は第2単位唐草が屈曲する。第3単位唐草両端に笵傷が確認でき、右端の唐草はこの笵傷により3叉にみえる。D種は第2単位唐草の巻きが強い。これら4種は260型式と造瓦技法が同じである。

262型式は花弁が3弁であるが、左右の弁が大きく、昆虫の眼球風の橘唐草紋。A・B・Cの3種がある。A種は第2単位・第3単位の唐草が長い。B種は第2単位の唐草が大きい。C種は第2単位の唐草が短く小さい。これら3種は260・261型式と造瓦技法が同じである。

270型式は梵字をあらわした文字紋。A種がある。右端から「キャ・ラ・ア」とあり、「キャ・カ・ラ・バ・ア」の五大種字をあらわしたものと考えられる。顎貼り付け技法である。凸面はタテナデを施し、顎付近のみヨコナデを行う。薬師寺285、唐招提寺例[63]、法勝寺例[64]、円勝寺例[65]はよく似るが、異笵である。

274型式は内区に圏線で囲んだ文字をあらわし、内区と外区を界線で分かつ文字紋。A・Bの2種がある。A種は「大安寺」の3文字を右から左に配する。顎裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法である。顎面はヨコナデ、顎部瓦当裏面・凸面平瓦部はタテケズリを施す。顎接合部側縁付近には凹型台の圧痕がある。凹面は瓦当沿いをヨコケズリするが、他は布目痕。凹面両側端部はタテケズリ。西大寺387Aは同笵の可能性が高い。B種は「大安寺寶塔」の5文字を左から右に配する。観察しえた調整等の造瓦技法はA種と同じであるが、1点だけ顎部瓦当裏面と顎段部にヨコナデを施すものがある。

Ⅲ　各軒瓦の年代観

Ⅱ章で紹介した軒瓦は、大半が包含層からの出土であり、層位的事実や共伴土器にもとづく検討には限界がある。そのため編年に際しては、史料にみえる平安時代以降の大安寺堂塔の造営・修理・被災記事を集め（表1）、他寺院出土同笵瓦の年代観や、造瓦技法の変遷を併せて検討し、図9のように13期に編年した。

平安前期は長岡京遷都がなされた延暦3(784)年から、延喜11（911）年の延喜火災に遭う前までである。この時期、史料では造瓦を要したとみられる造営工事は大同2年（807）の塔中院建立のみである。[66]しかし、発掘調査成果では、西中房南列の西側で、西小子房とみられる10世紀前半頃の礎石建物が発見されている。[67]また西塔の調査でも、その完成は平安時代まで下ることが指摘されており、[68]平安前期には、いまだ境内各所で活発に造営工事が行われていたことがうかがえる。

平安前期に比定できる軒瓦には、軒丸瓦15Aと51A、軒平瓦は231Aと236Aがある。大安寺15Aは法隆寺15Aaと同笵で、法隆寺15Aaは法隆寺242Aと組合い、貞観元年（859）の道詮による修理時の所用瓦と考えられている。[69]大安寺では法隆寺242Aの同笵品は出土していないが、法隆寺242Aと紋様が似るものに231Aがあり、大安寺では15A－231Aという組み合わせで、平安前期に使用された可能性を考える。236Aは、紋様構成が奈良時代の「大安寺式」軒瓦、平城京6716型式に似ることから平安前期に比定した。51Aaは同笵品が平城京東三坊大路東側溝で延喜通宝と共に出土しており、この銭貨の初鋳である908年以前とされている。[70]51Ab・Ac・Adに関しては、造瓦技法が共通する為、製作の断絶は無く、改笵しながら連続して製作されていったものと考えられる。ただしAdは、瓦当厚が大きく、AcとAdの製作時間差は広くみたほうがよいのかもしれない。51Aと組み合う軒平瓦は、西塔の調査で明らかになった。軒丸瓦では51Aが、軒平瓦では奈良時代とみていた6712Bが最も多く西塔から出土し、51A－6712Bで使用されていることが判明した。[71]櫟本廃寺では51Adと6712Bの同笵の可能性が高い両者が採集されており、[72]このことからも、51Aと6712Bは組み合うとみて良い。6712Bの笵型製作年代に関しては、その紋様構成から、奈良時代の可能性も残り、笵型製作は奈良時代であるが、その笵型を用いた軒平瓦の製作は平安時代以降も続いていた可能性が考えられる。

平安中期は延喜11(911)年の火災から、寛仁元(1017)年の火災に遭う前までである。史料では延喜11（911）年に講堂・三面僧房が焼失、天暦3（949）年に西塔が雷火にあったと記されているが、いずれも修理に関する記

表1　長岡京遷都後の大安寺略年表（主に造営・被災関連）

西暦	和暦	月日	事項
784	延暦3	11.11	長岡京遷都。『続日本紀』
790	延暦9	12.28	桓武天皇の母、高野新笠の1周忌を行う。『続紀』
806	大同1	4.22	大安寺・秋篠寺等に光仁天皇の五七日の斎を設ける。『日本後紀』
807	大同2	8.17	八幡大菩薩を宇佐より移し、大安寺の東室第七院石清水房に安置し、次いで南大門（南中門）南面西脇に塔中院（護国寺、五間四面瓦葺堂）を建立する。『大安寺八幡宮御座記并塔中院建立之次第』
859	貞観1	—	三間四面檜皮葺の大唐院を西僧房南端に建立する。『大安寺唐院記』
863	貞観5	7.27	新銭・鉄を修理料として、銭100貫・鉄100挺を施入。『日本三代実録』
876	貞観18	7.18	塔、雷雨により震動する。『日本三代実録』
911	延喜11	5.1	講堂・三面僧房が焼失する。『一代要記』
949	天暦3	11.10	雷火により西塔が焼失する。『日本紀略』
989	永祚1	8.13	大風で塔の露盤が落ちる。『東大寺要録』
999	長保1	10.15	藤原行成参詣。この時点の別当、平超がこの頃までに伽藍の小修理を行い、修造が行き届き「殊なる破損なし」と記される。『権記』
1017	寛仁1	3.1	大安寺が焼失する。東塔、釈迦如来像1体のみ免れる。『日本紀略』・『扶桑略紀』・菅家本『諸寺縁起集』
1018	寛仁2	5.11	東大寺別当深覚が大安寺の再建を計り、藤原実資の内意を問う。『小右記』
		12.27	造大安寺司を定め、造営を議する。『日本紀略』『小右記』『左経記』
1023	治安3	6.23	造大安寺司を改める。『小右記』
		7.20	藤原実資、造大安寺杣司進材木解文をみる。『小右記』
		8.5	造大安寺司、造営の材木色目を注進する。『小右記』
		閏9.26	材木配分を奏する。『小右記』
1029	長元2	— —	鴻助、別当となる。『大安寺別当次第』 源経頼、小槻宿祢が造大安寺長官になる。『類聚符宣抄』
1035	長元8	10.29	鴻助、金堂造立によって法橋となる。『僧綱補任』『大安寺別当次第』
1038	長暦2	4.8	造大安寺長官を廃する。『公卿補任』
1041	長久2	9.13	大安寺が焼失する。『扶桑略記』
1047	永承2	2.12	興福寺が永承被災後の復興の為、大安寺瓦屋を借り上げる。『造興福寺記』
1076	承保3	—	宝殿1宇と三重塔1基が焼失する。『大安寺崇道天皇御院八島両所記文』
1087	寛治1	12.28	隆禅、別当となる。任中に講堂を造立する。『中右記』『大安寺別当次第』
1090	寛治4	12.24	この日までに金堂・東西楽門・中門・回廊・七重宝塔・倉・東西大門・西面築垣等を修造する。また、寛治8年にかけて築垣・西大門・僧房等を新造。『京都御所東山御文庫記録』
1094	嘉保1	5.29	官宣旨を下し、講堂・南大門など造営のため、寺領近江野洲荘などに国司の入勘及び、臨時雑役の徴課を停止させる。『京都御所東山御文庫記録』
1098	承徳2	10.12	隆禅が講堂を再建し、人々が大安寺の釈迦仏を奉見する。『中右記』
1101	康和3	1.24	永縁、別当となる。任中の1101年から1116年の間に鐘楼・経蔵建立。『大安寺別当次第』
1116	永久4	5.23	永縁を伽藍修理の功績により法印に叙す。『僧綱補任』
1140	保延6	3.15	大江親通、2度目の南都七大寺の巡礼。四面に歩廊が付いた金堂・講堂・七重東塔・西僧房があり、西塔は礎石が残存するのみで、東僧房も無いこと等を記す。『七大寺巡礼私記』
1204	元久1	4月	塔修理を勧進する。『春華秋月抄』
1213	建保1	12.30	成宝、別当となる。『大安寺別当次第』
1253	建長5	10.2 —	宗性、別当となる。任中に塔を修理する。『大安寺別当次第』 宗性、塔・金堂回廊の修造料を寄進する。『東大寺文書』
1260	文応1	7月	宗性、東大寺別当となり、定親、大安寺別当となる。『大安寺別当次第』
1266	文永3	—	宗性再び、大安寺別当となる。任中に金堂の瓦葺き替え、南大門の修理を行い、東西南面の大垣と塔四面の大垣を築く。『東大寺文書』『大安寺別当次第』
1296	永仁4	—	東塔が雷火により焼失。『和漢春秋暦』
1345	興国6 貞和1	6.23	興福寺造営料の大和土打段米を大安寺に移す。『春日神社文書』
1385	至徳2 元中2	3.29	長老坊へ強盗が入り、放火。外長僧坊及び、重宝焼失。翌月、再建勧進。『細々要記』
1436	永享8	11.7	新坊へ強盗が入り、仏具・本尊が奪われ、南大門の脇が壊される。『経覚私要鈔』
1449	宝徳1	4.12	京畿で大地震。『康富記』『大乗院寺社雑事記』
1459	長禄3	9.10	大風で金堂の東西回廊が倒れる。『大乗院寺社雑事記』
1475	文明7	7.11	尋尊、大安寺金堂・文殊堂巡礼。もと講堂・食堂・東塔にあった本尊を金堂で見る。『大乗院寺社雑事記』
長禄・寛正（1457～1466）頃から文明12（1480）頃			この頃、金堂・西僧房の一部・文殊堂・大湯屋・宝蔵・塔中院・八幡社があり、講堂・東塔に関しては炎上後、再建されていないことが記される。菅家本『諸寺縁起集』
1483	文明15	7.15	大安寺室勧進踊念仏。『大乗院寺社雑事記』
1488	長享2	10.11	太閤、大安寺金堂を巡礼。『大乗院寺社雑事記』
1494	明応3	5.7	大地震。『大乗院寺社雑事記』『招提千歳伝記』
1585	天正13	11.29	近畿、東海で大地震。堂舎大破。『鏑木家文書』
1590	天正18	12.15	一晏法師による本堂修理成る。『多聞院日記』
1596	慶長1	閏7.12	畿内で大地震。堂舎ことごとく破滅。『鏑木家文書』
1661	寛文1	—	大安寺は今、二間四面の舎のみ残ると記される。『南北二京霊地集』
1675	延宝3	—	大安寺は今、護摩堂一宇のみ残ると記される。『南都名所集』
1711	正徳1	7月	海竜王寺の高籤が再興を企てる。『鏑木家文書』
1838	天保9	—	大安寺は今、小庵がのこるばかりと記される。『大和巡日記』

述は無い。ただし長保元（999）年、大安寺を参詣した藤原行成は、修造が行き届き、「殊なる破損無し」と『権記』に記していることから、10世紀末頃までには延喜・天暦被災に対する再建事業が行われたのかもしれない。しかし、この時期に比定できる軒瓦は軒平瓦231 B 1点だけである。231 Bは925年から995年の間に比定されている法隆寺242 Fに紋様構成が類似し、同じく10世紀代とする横井廃寺ＹＫＨ－11と同笵であること[73]から、平安中期に比定できる。軒瓦の種類・点数の多寡は、瓦葺建物の改修程度を表すものであろうから、延喜・天暦被災に対する再建があったのであれば、前代の瓦笵を利用して製作された軒瓦で修理したのであろうか。あるいは檜皮など有機質の屋根材が使用されたのかも知れない。

平安後期Ⅰは、寛仁元（1017）年の火災から、それに対する再建が一段落したとみられる康和2（1100）年まで。寛仁の火災は被害が大きく、『扶桑略記』は「遺るところ塔婆なり」と記し、翌年には造大安寺長官以下が任じられている。造大安寺長官は長暦2（1038）年に廃されているので、この頃までに、復興が概ね完了したことがうかがえる。承徳2（1098）年には別当隆禅が講堂を新造したと記されていることから、講堂再建についてはこの頃までかかったとがわかる。なお、『造興福寺記』には永承元（1046）年に興福寺金堂が焼失し、再建にあたって必要な瓦を製作する瓦屋として、翌年に大安寺瓦屋を借り上げるという記事がある。しかしその後、大安寺瓦屋は興福寺金堂の瓦の製作を免除されているのであるが、金堂以外の建物に大安寺瓦屋が瓦を供給した可能性はあると考え、この大安寺瓦屋こそ、大安寺杉山瓦窯4号窯の造り替え前の窯ではないかとの指摘がある[74]。

この時期に比定できる軒瓦としては、まず大安寺39 A・242 Aが挙げられる。大安寺39 Aは薬師寺39と同笵の可能性が高く、大安寺242 Aは薬師寺245に似る[75]。薬師寺では39－245の組み合せが成立し、天禄4（973）年の火災後の再興時主要瓦で、973年から1040年の間に比定されている[76]。このことから大安寺39 A－242 Aの組み合わせの可能性が考えられる。さらに大安寺242 Bは、同様に天禄火災後の再建瓦と考えられている薬師寺246と同笵で、大安寺242 Bは笵傷進行から、薬師寺246よりも後出と判明していること[77]から、大安寺39 A－242 Aと242 Bを、薬師寺への供給が一段落したであろう、寛仁の大火災後の復興期に使用された可能性を考え、平安後期Ⅰに比定した。次に大安寺46 Aは、治安3年（1023）年の東院修理時の所用瓦である法隆寺50 Aと同笵の可能性が高いことから、平安後期Ⅰに比定した。大安寺34 Aは薬師寺86と同笵で、笵傷の進行段階から、元来薬師寺が所有していた笵型で、のち製品が大安寺に供給されたことが明らかにされている[78]。薬師寺86は左から右へ偏行する唐草紋軒平瓦薬師寺276と組み合うとされているが、大安寺では薬師寺276の同笵品は出土しない。ただし、大安寺220 A bは薬師寺276の紋様構成の裏返しであることから、大安寺34 A－220 A bの組み合せが指摘されている[79]。薬師寺86が1040から1080年の間と考えられていることから、大安寺34 A－220 Aは薬師寺供給後の平安後期Ⅰに比定した。大安寺60 Bは同笵品が長谷寺観音堂で出土する。中房に巴紋を配した複弁蓮華紋軒丸瓦については、まず大阪府八尾市向山瓦窯産の河内系軒丸瓦が11世紀第4四半期に成立し、12世紀前半期を通じて盛行したとする考えがあった[80]。その後大安寺60 Bと同笵の長谷寺観音堂出土品こそ、中房に巴紋を配する複弁蓮華紋軒丸瓦の祖形と位置付け、11世紀中頃とする考え[81]が出されており、大安寺60 Bも平安時代後期Ⅰに比定した。大安寺55 Aについては、1078年から1103年頃に比定される興福寺Ⅵ丸Ｅ5と同笵の可能性の高いこと[82]から、平安後期Ⅰに比定した。大安寺240 Aについては、改笵資料が薬師寺出土品、興福寺Ⅵ平Ｄ8と判明しており、供給順序は大安寺から薬師寺・興福寺の順であると指摘されている[83]。興福寺Ⅵ平Ｄ8は承暦2年（1078）の五重小塔再建時の所用瓦で、大安寺240 Aはそれ以前の平安後期Ⅰに比定した。大安寺13 Aは興福寺Ⅵ丸Ｄ4と、大安寺235 Aは興福寺Ⅵ平Ｅ1と同笵の可能性が高い。法隆寺では大安寺235 Aと紋様構成が似る法隆寺252 Aが、薬研状に窪む蓮弁を飾る法隆寺14 Bと組む[84]。このことから大安寺では同じく薬研状に窪む蓮弁を飾る13 Aと235 Aが組合うと考える。興福寺Ⅵ丸Ｄ4、Ⅵ平Ｅ1ともに1078から1129年の間に比定されていることから、大安寺13 A－235 Aは平安後期Ⅰ後半からⅡ期前半の間に比定した。大安寺170 Aと270 Aについては、大安寺において瓦当面に梵字を飾る軒瓦が、このそれぞれ1種のみであることから、170 A－270 Aの組み合わせを考えた。大安寺270 Aは薬師寺285と良く似ており、これが11世紀中頃から12世紀末の製作年代を与えられていることから、170 A－270 Aも平安後期Ⅰ後半から平安後期Ⅱの間に比定した。大安寺238 Aについては、これと同笵とみられるものが薬師寺269、興福寺Ⅵ平Ｃ1、西大寺276 B、唐招提寺例で、笵傷進行からa・b・cの3段階に分けられている[85]。大安寺238 Aは右第3単位の左側に笵傷が確認できることからb段階

と判り、同段階が出土する興福寺では1078から1129年頃の年代観が与えられていることから、大安寺238Aは平安後期Ⅰの末から、平安後期Ⅱと考えた。

平安後期Ⅰの軒瓦は南都諸大寺との同笵品が多く、寛仁火災後の再建事業には、大和諸大寺の協力が大きかったことがうかがえる。ただし、史料に見える被災建物の多さとその後の復興の規模とを考えると、その出土点数は少なすぎる。笵型を長期使用している例は他の寺院でも確認されていることから、平安後期Ⅰの時代になっても、奈良時代に製作した笵型のうち、使用に耐えるものを利用して、軒瓦が生産されていたのであろうか。

平安後期Ⅱは康和2（1100）年から治承4（1180）年までである。史料にみえる修造には永縁別当任中の1101年から1116年までの間に行われた鐘楼・経蔵の造立がある。経楼の調査では、平安時代以降の軒丸瓦は39A、51A、60A、77Aが出土している[86]。大安寺60Aは、弁数など紋様の比較から、大安寺60Bに次ぐものと考え、平安後期Ⅱに比定できる。60Aと77Aは胎土・焼成・色調が同じで、指によるナデツケを多用するという造瓦技法が共通することから、同時期の製作と考える。さらに60Aの大半が経楼の出土であり、77Aも経楼以外では出土しないことからみて、60A・77Aは永縁による鐘楼・経蔵造立時所用瓦と考える。なお60Aに関しては、同じく蓮華紋を主紋様とし、中房に巴紋を配する河内系軒丸瓦に先行するとの評価もあり[87]、60Aの笵型の製作については、河内系軒丸瓦が出現する11世紀第4四半期以前に遡る可能性もある。大安寺36Aについては、1146年から1192年の間に比定される法隆寺西院伽藍回廊修理瓦である法隆寺36Cbと同笵の可能性が高いことから、平安後期Ⅱに比定した。大安寺251Aについては1125年から1177年の間に比定される興福寺Ⅶ平A11と同笵の可能性が高く、平安後期Ⅱに比定した。大安寺244Aは右半部片であるが、独特な唐草紋様から西大寺288Aの左半部の可能性が考えられる。西大寺288Aが保延4（1138）年の四王堂造立時の生産とみられていることから[88]、244Aを平安後期Ⅱと比定した。大安寺232A・233A・233Bは、1106年から1192年の間に比定される法隆寺348Abに紋様が似ており、平安後期Ⅱに推定する。大安寺41A・203Aについては、杉山瓦窯の調査で、41A・203Aが窯への転用材として使用されず、大安寺より杉山瓦窯群灰原からの出土が顕著で、胎土・焼成・色調が酷似することから、12世紀中頃以降の4号窯の製品である可能性が指摘されている[89]。この考えに従い、41A・203Aは平安後期Ⅱとした。なお203Aの成形技法が215Aと共通することから215Aも平安後期Ⅱに比定した。

鎌倉前期は治承4（1180）から建長3（1253）年までである。中世軒瓦の年代は、造瓦技法から細分できることが明らかにされており、鎌倉・室町期の軒瓦は造瓦技法を中心に年代を比定した。ただし、分類できた巴紋軒丸瓦は、ほとんどが年代の細分に有効な丸瓦部が欠失している為、紀年銘が多く残る法隆寺の資料を参考に、紋様の差異に注意して編年した。

史料では元久元（1204）年に塔修理の勧進が行われているが、修造がどの程度進んだかは不明である。この時期は大安寺修造に関する史料が、この一つしか見出せず、比例するように比定できる軒瓦も少ない。法隆寺では巴頭部が尖り、巴頭同士接続する巴紋が1192年から1261年にかけての特徴とされている為、105Aは鎌倉前期に比定した。大安寺202A・244Aはともに顎貼り付け技法で、顎部・凸面平瓦部はタテケズリのまま仕上げており、ともに鎌倉時代前期に比定できる。ただし、244Aには顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕が無いことから、1180年から1210年の間とみて、鎌倉前期前半に比定した。これに対し202Aの方は顎接合部側縁付近に凹型台の圧痕が残り、同笵の可能性が高い西安寺例が1210年から1260年の間とされていることから[90]、鎌倉前期後半に比定した。

鎌倉後期は宗性が大安寺別当に就任した建長5（1253）年から元弘3（1333）年までで、この時期、南都諸寺では軒平瓦に瓦当貼り付け技法が行われたものが出現する。史料では建長5（1253）年東大寺僧宗性が大安寺別当になり、塔を修理する。西塔は既に保延6年（1140）礎石のみと記されているから、ここで修理されたのは東塔である。その後、宗性は1260年から1263年までの間は東大寺別当になっていたが、文永3（1266）年再び大安寺別当になり、南大門を修理し、金堂の瓦葺き替えを行い、東西南面の大垣と塔四面の大垣を築いている[91]。その後東塔は永仁4（1296）年、雷火で焼失と記されており[92]、修造後半世紀も経たず、灰燼に帰したとがわかる。発掘調査で、13世紀頃に南大門礎石の据替え行われたことが確認されており[93]、これは宗性の南大門修理を裏付ける。

宗性の修造時に製作された軒瓦には173A－274A・174A－274Bの二組を挙げることができる。軒丸瓦173Aと軒平瓦274Aは、両者とも「大安寺」と記す文字紋であり、意匠の共通性から173A—274Aが組み合うと考える。「大安寺塔」と記す文字紋軒丸瓦174Aは、「大安寺寶塔」と記す文字紋軒平瓦274Bとの意匠の共通性から、174A—274Bが組み合うと考える。軒平瓦

274 A・274 Bは顎裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法である。またその大半が顎部瓦当裏面にタテケズリを施しており、宗性の修造期の製作と考えて良い。瓦当紋様から、東塔修造および塔四面の大垣新造には「大安寺塔」・「大安寺寶塔」と記された軒瓦174 A－274 Bを、南大門修理や金堂の瓦葺き替え等、塔以外の堂舎修理には「大安寺」と記された軒瓦173 A—274 Aを主体的に用いたと考える。なお、内区に「大安寺」と記し、外区に珠紋帯がある175 Aの造瓦技法については173 A・174 Aと同じであるため、これも鎌倉後期に比定した。大安寺に寺名を飾る軒瓦が出現した背景には、東大寺僧で、東大寺別当にも任じられた宗性の指揮のもと、東大寺の瓦工が大安寺堂塔修理瓦の製作に参加した為と考えられる。252 Aについては文永8年(1271)の東福寺法堂・祖堂・祠堂建設の際の所用瓦、東福寺63と同笵の可能性が高いことから、鎌倉後期に比定した。205 A・205 Bについては顎裏面に補強用粘土を用いる瓦当貼り付け技法であること、連珠紋の盛行は1300年頃までと考えられていること[94]から鎌倉後期に比定した。大安寺246 A、250 Cについては、嘉暦2（1327）年の尾道浄土寺本堂再建瓦と同笵で、大安寺250 Eも250 Cと同様に、唐草が連続する半截花紋という特徴から、246 A・250 C・Eは鎌倉後期末に比定した。大安寺87 B・91 A・104 A・107 A・108 A・110 A・111 Aについては、巴紋が巴の頭部同士は接しないが互いに近接すること、巴頭部が尖り気味であること、巴紋はやや高く丸みをもつことが共通する。このような特徴をもつ巴紋軒丸瓦は、法隆寺では、1261年から1333の間に比定されていることから、鎌倉後期とした。大安寺107 B・107 C・108 Bについては巴の頭部同士が、互いに近接し、巴紋はやや高く丸みを持つ特徴はあるが、巴の頭部は円形に近くなっており、この特徴は法隆寺では室町前期の特徴になる為、鎌倉後期から室町前期にかけてのものと推定した。

室町前期は、元弘3（1333）年から康暦2（1380）年までである。史料では康永4（1345）年に、興福寺造営料の大和土打段米の所管を大安寺に移していることから、大安寺の修造が行われた可能性が指摘されている[95]。この時に製作された軒平瓦は、紋様構成は唐草紋が完全に分離し、瓦当貼り付け技法であり、瓦当後縁に面取りのあるものとないものが共存する250 A・Bと指摘されている[96]。250 Bは平安時代以降の軒平瓦で最も出土点数が多い。そのことから、平安時代の51 Aを除き、平安時代以降の軒丸瓦で最も出土点数が多いものを探すと88 Aを挙げることができ、88 A－250 Bの組み合わせが考えられる。春日東塔南回廊・三面築地塀跡から、大安寺88 Aと大安寺250 B aの両者と同笵の可能性が高いものが出土しており、この考えを補強できる。250 Aは、250 Bの大型品とみられ、88 Aと同様の紋様構成で大型品である88 Bと組み合うと考える。88 A・88 Bともに造瓦技法・胎土も同じである。巴の頭部同士近いこと、巴の頭は円形に近いこと、巴紋の断面が半球状である特徴は法隆寺では1333年から1361年の間の特徴と指摘されており、88 B—250 Aと88 A—250 Bの大小2組で使用されたと考える。なお、他に250 A・Bと同時期の瓦には、241 Aが指摘されており[97]、248 Aも紋様構成の共通性から、250 A・Bと同じ室町前期に比定した。大安寺254 Aは同笵の可能性が高い西大寺350 Aが1333から1380年の間に比定されている[98]こと、大安寺222 Aは同笵の可能性が高い法隆寺230 Aが康安元（1361）年の地震後の補修用と考えられていることから、それぞれ室町前期に比定した。

室町中期は康暦2(1380)年から永享2(1430)年まで、**室町後期Ⅰ**は永享2（1430）から延徳2（1490）まで、**室町後期Ⅱ**は、軒平瓦が顎貼り付け技法となる延徳2(1490）から慶長8（1603）年までとした。室町中期から室町後期Ⅱの時期の史料は、元中2（1385）年の火災、永享8（1436）年、長録3（1459）年、明応3（1494）年、天正13（1585）年、慶長元（1596）年の震災と、被災記事が多く、造営関連の記録は天正18（1590）年の金堂修理のみである。史料に比例して、室町中期から室町後期Ⅱの時期の軒瓦は少なく、大規模な修理は無かったと考えられる。

大安寺254 Bは造瓦技法・紋様構成が、254 Aとほぼ同じであるが、瓦当下縁に面取りを施すことが異なる。瓦当下縁に面取りを施す軒平瓦は1390年以降と指摘されており[99]、室町中期に比定した。

大安寺246 B・247 Aは瓦当貼り付け技法であるが、瓦当外縁をナデで調整していることから、室町後期Ⅰに比定した。さらに、247 Aについては、応仁2（1468）年から文明6（1474）年にかけての元興寺本堂修理に際して使用されたと考えられている[100]元興寺32と同笵の可能性が高く、室町後期Ⅰ末頃に比定した。

大安寺250 Fは、天文4（1535）年の銘がある法隆寺272 Jと同笵であることから、室町後期Ⅱとした。

江戸前期は慶長8（1603）年から宝永元（1704）年、**江戸中期**は宝永元（1704）年から享和2（1802）年までとした。史料には寛文元（1661）年に、大安寺は「二間四面の舎」残るのみと記され、室町後期Ⅱまでの被災

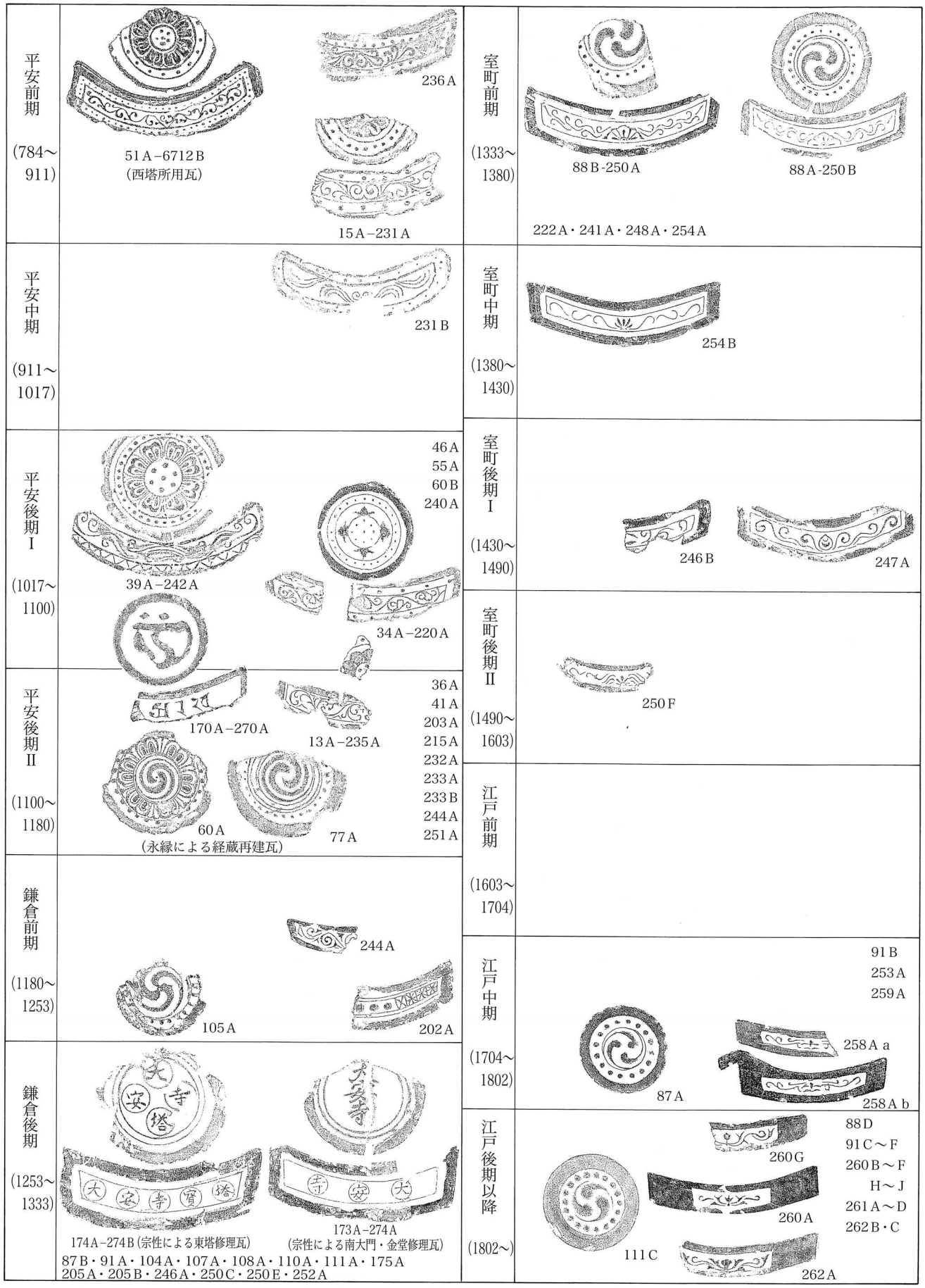

図9　大安寺旧境内出土平安時代以降の軒瓦編年概略図（軒瓦の拓本　1/8）

で、多くの建物が失われていたと察せられる。そして江戸時代ではこれ以降、修理・再興が成ったという記事が無い。史料に比例し、江戸前期に比定できる軒瓦も無い。

江戸中期の瓦には87 A・91 B・253 A・258 A・259 Aを挙げることができる。87 A・91 Bは瓦当面に確認できるキラコが、法隆寺では18世紀後半から確認できること、外縁幅が後に述べる江戸後期としたものより、狭いことから江戸中期後半に比定した。253 A・258 A・259 Aは、唐草が連続しており、特に253 Aは1603年から1650年に比定される法隆寺280 Bに紋様構成が似る。しかし253 A・258 A・259 Aの瓦当面にはキラコが確認できることから、江戸中期後半に比定した。史料との比較から江戸中期後半以降の軒瓦は、その大半が大安寺の所用瓦ではなく、境内が町屋と化した後、蔵などに使用されたものと考える。言い換えれば、大安寺の町屋では江戸中期後半以降に屋根瓦が使用され始めたとも言えよう。

江戸後期以降は享和2（1802）年以降である。江戸後期以降を代表するのは橘紋で、大安寺出土橘紋軒平瓦には260 A～J、261 A～D、262 A～Cがある。法隆寺では、花弁と上部第1単位の唐草の間隔が広い橘紋は天保年間（1830～1844）以前とされ、花弁と上部第1単位の唐草の間隔がほとんど無い橘紋は天保年間以降と考えられている。以上のことから260 E・F・Gは天保年間以前、260 A・B・C・D・H・I・J、261 A・B・C・D、262 A・B・Cは天保年間以降に比定できる。これら橘紋軒平瓦の外縁端部は面取りを施していることから、同時期の軒丸瓦の外縁端部にも面取りを施すものと考えることができる。外縁端部に面取りを施す巴紋軒丸瓦は、88 D・91 C・91 D・91 E・91 F・111 Cがある。これらは全て、巴がオタマジャクシ形であり、瓦当面にキラコが確認できることも共通する。これらの特徴を法隆寺例と比較しても江戸後期以降に比定してよいと考える。

Ⅳ　おわりに

本稿では大安寺から出土した平安時代以降の軒瓦を分類、編年してみた。今回の作業を思い立ったのは、大安寺杉山瓦窯の操業年代が奈良時代なのであろうかと疑問を持ったことに始まる[101]。杉山瓦窯では製品といえる丸・平瓦は出土しているが、軒瓦は出土していない。そこで製品である丸・平瓦の年代的特徴を抽出するうえで、まず大安寺出土平安以降の軒瓦を編年し、その丸瓦部・平瓦部の特徴を抽出し、それを杉山瓦窯製の丸・平瓦と対比させてみたいと考えたのである。この検討については稿を改めて述べてみたい。

本稿の執筆にあたっては今井晃樹氏、中井公氏、宮崎正裕氏、山前智敬氏に御教示・御協力を頂いた。文末ではありますが、記して感謝致します。

1）山本忠尚「大安寺の屋瓦」『大安寺史・史料』大安寺　1984
2）軒瓦にはすべて数字とアルファベットからなる型式番号を設定した。大文字のアルファベットは笵型の違いを示す。型式番号は大安寺における通し番号として設定したが、空きを設けているため連続しない。なお記述に際しては、たとえば12型式A種であれば、12 Aというように、型式や種を省略することがある。また本稿で使用した拓本のうち、大安寺出土瓦が破片である場合、破損部分を複数の破片で復元したものがある。さらに15 A・254 Aの拓本では、破損部分を大安寺出土品以外の同笵品で復元しており、その部分は墨を薄くして表示した。34 A・246 Aに関しては、拓本と実測図が、それぞれ別の資料であるが、同笵品で大安寺出土品である。
3）中島和彦「平城京左京四条六坊十五坪・奈良町遺跡の調査　第482次」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書　平成14年度』奈良市教育委員会（以下、奈良市教委）2006
4）藪中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教藝術』194号毎日新聞社　1991　なお、以下の本文中で興福寺例と同笵もしくは同笵の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
5）小澤毅「第3章遺物　3瓦塼」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺　1990　なお、以下の本文中で西大寺例と同笵もしくは同笵の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
6）佐川正敏ほか『法隆寺の至宝　瓦』法隆寺昭和資財帳15　1992　なお、以下の本文中で法隆寺例と同笵もしくは同笵の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
7）注1の文献と同じ。
8）山崎信二「第Ⅴ章遺物　2瓦塼」『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所（以下、奈文研）1987　なお、以下の本文中で薬師寺例と同笵もしくは同笵の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
9）注8の文献のＦｉｇ40－2。
10）山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集』Ⅵ　奈文研　1980
11）浜中邦弘他「軒丸瓦・軒平瓦型式一覧表」『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』（宗）平等院　2003　なお、以下の本文中で平等院例と同笵もしくは同笵の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
12）国宝唐招提寺礼堂修理事務所『国宝唐招提寺礼堂修理工事報告書』1941　Ｆｉｇ．12
13）奈良県教育委員会（以下、奈良県教委）文化財保存課『唐招提寺宝蔵および経蔵修理工事報告書』1962
14）宮崎正裕「第Ⅳ章出土遺物　第2節瓦・塼類」『史跡大安寺旧境内Ⅰ－杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告』奈良市教委　1997
15）田辺征夫「Ⅳ平城京の遺物　2瓦塼類」『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈文研　1975
16）宮崎正裕「平城京左京四条六坊十四坪・奈良町遺跡の調査　第424次出土遺物　瓦」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書　平成11年度』奈良市教委　2001
17）飛鳥資料館『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』1992　Ｐ20－70
18）名古屋市博物館『名古屋市博物館資料図版目録7　名古屋市博物館収蔵大和古瓦図版目録』2006　No.01115
19）以下、巴紋の巻き方向については、頭部から尾部へ向っての方向とし、時計回りの方向へ尾部が流れるものを「右巻き」、逆時計回りの方向へ尾部が流れるものを「左巻き」とした。
20）2000年、橿原考古学研究所の岡林孝作氏、奈文研の千田剛道氏とともに行った実物照合により確認した。
21）関野貞「瓦」『考古学講座5』雄山閣　1928　図597
22）稲垣晋也ほか『春日西塔・東塔跡の発掘　殿下の御塔・院の御塔』奈良国立博物館　1982
23）石田茂作編『古瓦図鑑』1930　ＰＬ.89

24) 注6の文献の写真図版111。なお、同書では法隆寺74Aは大安寺例と同笵で、元久元年（1204）の大安寺塔修理時の所用瓦と述べられている。しかし大安寺174Aと組み合う軒平瓦274Bは瓦当貼り付け技法であることから、1204年の製作とするには古すぎると考える。
25) 関野貞「瓦」『考古学講座5』雄山閣　1928　図675
26) 保井芳太郎『大和上代寺院志』1932　図版61－華瓦5および石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936　図版第173—25
27) 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936　図版第103—102、図版104—102′
28) 注27の文献の図版第156—24。
29) 瓦当貼り付け技法の定義は山崎信二『中世瓦の研究』奈文研　2000に拠る。なお、芦田淳一「元興寺極楽坊中世軒平瓦の再検討」『元興寺文化財研究』No.70（財）元興寺文化財研究所　1999にいう「紋様面・顎貼り付け技法」のことでもある。
30) 注18の文献のNo.07313。
31) 興福寺で採集されていることは、山前智敬氏の御教示による。
32) 奈文研『興福寺食堂発掘調査報告』1959　ＰＬ.39－8
33) 福山敏男・大塚ひろみ「法成寺の古瓦」『佛教藝術』68号　1968
34) 山崎信二「第Ⅵ章考察　２遺物　Ａ屋瓦」『薬師寺発掘調査報告』奈文研　1987
35) 木村捷三郎ほか『仁和寺境内発掘調査報告—御室会館建設に伴う調査—』（財）京都市埋蔵文化財研究所（以下京都市埋文研）の127ａ・127ｂおよび網伸也ほか『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋文研　1996　図版50－827
36) 坪之内徹「情報処理センター棟予定地の調査　Ⅲ遺物　３瓦」『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅳ』奈良女子大学1989　第6図－4
37) 原田憲二郎・島軒満「横井廃寺の軒瓦について」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要　1996』奈良市教委　1997　なお、以下の本文中で横井廃寺例と同笵もしくは同笵の可能性の高いものを挙げているにもかかわらず、本文注を入れていない場合、出典はこれと同じである。
38) 広岡孝信「第３章遺物　第３節瓦磚　Ⅰ期の瓦」『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書』奈良県教委　2000
39) 網伸也ほか『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋文研1996図版26－310
40) 山崎信二「６出土遺物（１）瓦」『興福寺　第１期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅰ』1999　第23図－29
41) 奈良県教委・財団法人建築研究協会編『唐招提寺防災工事・発掘調査報告』1995
42) 山崎信二「20　薬師寺宝積院の調査　第223－3次　Ｂ．瓦塼類」『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈文研　1992
43) 注14の文献と同じ。
44) 原田昌則ほか「宮町遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和56・57年度』八尾市教育委員会1983　図11－25
45) 注18の文献のNo.51301。
46) 奈良市在住の西川廉行氏が右半部の破片を７点採集・所蔵していた。
47) 山崎信二『中世瓦の研究』奈文研　2000　なお、尾道浄土寺例が大安寺246Ａと比べて、紋様がシャープであることから、大安寺246Ａの方が後出であることが確認されている。
48) 芦田淳一「元興寺極楽坊中世軒平瓦にみる瓦当接合技法の展開」『元興寺文化財研究』№67　財団法人元興寺文化財研究所　1998
49) 篠原豊一ほか「元興寺旧境内の調査　第７次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和61年度』奈良市教委　1987
50) なお、山崎信二『中世瓦の研究』奈文研　2000では大安寺出土品をＡ種（第44図10）、Ｂ種（第44図２）に分類するが、Ａ種、Ｂ種とも同笵で大安寺250Ａである。
51) 米田敏幸ほか『宮町遺跡発掘調査概要Ⅰ』八尾市教育委員会　1982　図９—26～31
52) 山崎信二『中世瓦の研究』奈文研　2000
53) 注22の文献と同じ。
54) 吉岡哲「大阪府八尾市内出土屋瓦について」『古代研究』16号　財団法人元興寺文化財研究所　1980および原田修他「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』第6号　1977
55) 注52の文献で、尾道浄土寺段階の笵型を、改笵したものが大安寺250Ｃであると明らかにされている。
56) 東福寺『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990
57) 今里幾次「姫路市松原八幡神社の出土遺物」『播磨古瓦の研究』真陽社1995　図6－3
58) 注52の文献と同じ。
59) 野島稔「第３章　第２次調査」『上清滝遺跡発掘調査概要報告書』四条畷市教育委員会　2006　図16および福永信雄「生駒山西麓の山岳寺院（大阪府）」『仏教藝術』265号　2004
60) 2009年、奈文研の今井晃樹氏のご好意により、西大寺350Ａと実物照合を行い、大安寺254Ａと同笵であることが判明した。
61) 注27の文献の図版第190—14・14′
62) 原田憲二郎「正暦寺旧境内の調査第１・２次　瓦塼類」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成10年度』奈良市教委　2001
63) 注8の文献のＦｉｇ.60
64) 注39の文献の図版33－458
65) 注39の文献の図版35－509
66) 貞観元（859）年に大唐院が建立されているが、檜皮葺きとある。
67) 中井公他「２．史跡大安寺旧境内（第25～28）の調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和61年度』奈良市教委　1987
68) 中井公「軒瓦からみた大安寺西塔の創建をめぐって」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』2007
69) 以下、法隆寺資料の年代観は注6の文献に拠った。
70) 注1の文献と同じ。
71) 松浦五輪美「史跡大安寺旧境内（西塔跡）の調査　第100次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成14年度』奈良市教委　2006
72) 注17の文献のＰ20—70・71
73) 注37の文献と同じ。
74) 宮崎正裕「第Ⅵ章考察　第４節杉山瓦窯出土の瓦」『史跡大安寺旧境内Ⅰ－杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告』奈良市教委　1997
75) 注8の文献で、よく似るが異笵と報告されている。
76) 以下、薬師寺資料の年代観は注34の文献に拠った。
77) 注5の文献で大安寺242Ｂが薬師寺246・西大寺270Ａより笵傷が進行していることが明らかにされている
78) 注10の文献と同じ。
79) 注34の文献と同じ。
80) 津々池惣一「平安時代後期の瓦－巴文瓦の様相について－」『研究紀要第３号』京都市埋文研　1996
81) 岡林孝作「第５章２中世以前の瓦の様相　Ｂ観音堂再建時の瓦」『長谷寺』奈良県立橿原考古学研究所　1999
82) 以下、平安時代の興福寺資料の年代観は注4の文献に拠った。
83) 注74の文献と同じ。
84) 注6の文献と同じ。
85) 注8の文献と同じ。
86) 原田憲二郎「Ⅰ史跡大安寺旧境内の調査（４）経楼の調査　第81次　瓦塼類」『奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書　平成10年度』奈良市教委　1999
87) 注81の文献と同じ。
88) 注5の文献と同じ。
89) 注74の文献と同じ。
90) 注52の文献と同じ。
91) 『法勝寺御八講問答記』紙背文書には、先度寺務（宗性１度目の大安寺別当期、1253年～）のとき塔を修理し、今度寺務（宗性２度目の大安寺別当期、1266年～）のとき、南大門修理、金堂瓦葺き替え、東西南面大垣と塔四面の大垣の新築とある。
92) 黒田昇義は『大和の古塔』天理時報社1943で、『和漢春秋暦』に永仁４年、雷火で大安寺東塔が焼失したことが記されていると述べる。
93) 中井公「３．史跡大安寺旧境内の調査　第38次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成元年度』奈良市教委　1989
94) 注52の文献と同じ。
95) 太田博太郎『南都七大寺の歴史と年表』1979
96～99) 注52の文献と同じ。
100) 注48の文献と同じ。
101) 大安寺杉山瓦窯の操業年代を奈良時代からとする考えに対する疑問は以前記したことがある。（原田憲二郎「記号「ʒ」が押捺された「大安寺式」軒瓦」『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』1999）その後、中井公氏も杉山瓦窯操業年代を平安時代以降とする考えを述べている。（中井公「大安寺杉山瓦窯の評価をめぐって」『考古学に学ぶⅡ』2003）

軒丸瓦計測値表（蓮華紋）

型式	直径	内区				外区				出土点数
						内縁		外縁		
		中房径	中房紋様	弁区径	弁数	幅	紋様	幅	高	
12 A			—		T	14	—	13	12	1
13 A			蓮子 1 + 8		T 10	15	S			2
15 A	176	36	蓮子 1 + 6	94	T 12	20	S 24	21	7	1
18 B	93	10	蓮子 1	66	T 16	3	—	10	7	1
34 A	143	48	蓮子 1 + 8	85	HS 4	12	S 24	17	6	
34 B					HS	4	—	11	7	1
36 A					F	—	—	18	7	1
39 A	186	58	蓮子 1 + 6	122	F 8	13	S	19	8	3
41 A	163	45	蓮子 4 + 8	99	F 6	13	S 24	19	12	7
45 A			蓮子		F	13	S	16	6	1
46 A		67	蓮子		F	14	S	14		
51 A a	162	42	蓮子 1 + 5	100	F 8	13	S 16	18	8	7
51 A b	163	42	蓮子 1 + 5	109	T 8	13	S 16	14	8	38
51 A c	156	42	蓮子 1 + 5	104	T 8	13	S 16	13	4	9
51 A d	170	44	蓮子 1 + 5	104	T 8	14	S 16	19	6	3
55 A	139	50	—	103	F 8	3	—	15	9	2
60 A	172	73	右巻き二巴	124	F 6	10	S	14	8	10
60 B	144	49	右巻き二巴	104	F 8	8	Sと×	12	4	

軒丸瓦計測値表（巴紋）

型式	直径	内区		外区					出土点数
				内縁			外縁		
		紋様（巴）	径	幅	紋様	界線	幅	高	
77 A	175	左二	114	8	S	内のみ	19 ～ 26	7	3
87 A	132	左三	66	18	S 16	内のみ	15	5	1
87 B	124	左三	74	11	S	内のみ	14	11	1
88 A	143	左三	83	14	S 24	内のみ	13 ～ 19	10	16
88 B		左三		16	S	内のみ	22	12	3
88 D		左三	55	17	S	内のみ	20	7	1
91 A		左三		16	S	—	16	7	2
91 B		左三	66	24	S	—	15	5	1
91 C	134	左三	58	18	S	—	20	7	2
91 D	133	左三	53	17	S 16	—	23	8	2
91 E		左三		16	S	—	26	10	2
91 F	137	左三	61	14	S 16	—	24	8	1
104 A		右三		15	S	内外	27	17	1
105 A		右三		11	S	内のみ	14	10	2
107 A		右三	84	11	S	内のみ	15		1
107 B		右三	95	10	S	内のみ	17	10	2
107 C		右三	90	13	S	内のみ	20	11	2
108 A		右三	97	23	S	内のみ	18	18	5
108 B		右三		16	S	内のみ	20	15	6
110 A		右三		15	S	外のみ	21	12	1
111 A	168	右三	102	11	S	—	22	11	7
111 C	147	右三	63	18	S 18	—	24	8	1

軒丸瓦計測値表（文字紋）

型式	直径	内区		外区				出土点数
				内縁		外縁		
		紋様 (文字)	径	幅	紋様	幅	高	
170 A	136	梵字「アーク」	112	—	—	12	7	
173 A	182	「大安寺」	118	16	K	16	17	29
174 A		「大安寺塔」		16	K	19	15	12
175 A		「大安寺」		17	S	19	14	3

軒平瓦計測値表

型式	最大幅	厚さ	内区		上外区		下外区		脇区		外区高	顎の形態	出土点数
			厚さ	紋様	厚さ	紋様	厚さ	紋様	幅	紋様			
202 A			20	K I	6	K	8	K	7	K	11	段	1
203 A				SとKT									2
205 A		52	20	S	5	—	5	—	—	—	10	段	5

大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦

型式	最大幅	厚さ	内区		上外区		下外区		脇区		外区高	顎の形態	出土点数
			厚さ	紋様	厚さ	紋様	厚さ	紋様	幅	紋様			
205 B		40	17	S	3	—	3	—	3	—	9	段	1
215 A		53	23	Sと唐草紋	5	—	3	—	3	—	5	直	1
220 A a			27	HK	10	S	10	S	10	S	3	直	6
220 A b		38	24	HK	10	—	—	—	—	—	5	直	
222 A		50	13	唐草紋	4	—	3	—	11	—	16	段	3
229 A		55	21	唐草紋	6	Sと唐草紋	12	LV	6	LV	4	直	2
231 A			31	KK		S	15	S			3	段	2
231 B	267	65	31	KK	11	S	10	S	15	S	4	直	1
232 A			25	KK	3	—			5	—	6	直	1
233 A		43	22	KK	4	—	3	—	4	—	4	曲	2
233 B			17	KK			2	—	3	—	6	直	1
235 A a		54	31	KK	12	—	11	—	18	—	2		
235 A b		48	28	KK	—	—	—	—	—	—	4	直	1
236 A		49	30	KK	8	S	8	S	9	S	4	曲	2
238 A			25	KK	4	—					2	曲	1
240 A			29	KK	5	—	4	—	5	—	5	直	15
241 A a		45	19	KK	3	—	2	—	3	—	6	段	5
241 A b			19	KK	3	—	2	—		—	6	段	2
242 A	272	49	34	KK	—	—	16	LV	—	—	2	直	
242 B	260	47	17	KK	21	S 17	9	LV 16	—	—	3	直	1
244 A		34	20	KK	—	—	—	—	—	—	6	曲	1
246 A			33	KK	4	—	3	—	—	—	10	段	4
246 B			24	KK	4	—		—	4	—	10	段	1
247 A		59	33	KK	3	—	3	—	3	—	6	段	11
248 A	257	59	30	KK	4	—	4	—	3	—	7	段	6
250 A	285	60	33	KK	4	—	4	—	4	—	10	段	10
250 B a	246	58	29	KK	4	—	4	—	5	—	8	段	48
250 B b			28	KK	4	—	4	—	5	—	8	段	1
250 C		66	29	KK	3	—	3	—	3	—	7	段	7
250 E		35	18	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	2
250 F			19	KK	—	—	—	—	—	—	4	段	1
251 A			36	KK	—	—	—	—	—	—	8	曲	4
252 A		54	17	KK	4	—	5	—	5	—	8	段	1
253 A		33	22	KK	—	—	—	—	—	—	4	段	1
254 A		69	31	KK	5	—	5	—	5	—	8	段	6
254 B	277	54	23	KK	4	—	4	—	4	—	6	段	1
258 A a		38	18	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	1
258 A b	215	41	19	KK	—	—	—	—	—	—	6	段	1
259 A		36	21	KK	—	—	—	—	—	—	2	段	1
260 A	253	39	24	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	2
260 B				KK	—	—	—	—	—	—	6	段	1
260 C		44	23	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	1
260 D		43	27	KK	—	—	—	—	—	—	3	段	1
260 E	224	43	20	KK	—	—	—	—	—	—	3	段	3
260 F			28	KK	—	—	—	—	—	—	4	段	1
260 G		38	23	KK	—	—	—	—	—	—	3	段	1
260 H		41	22	KK	—	—	—	—	—	—	6	段	1
260 I		42	23	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	1
260 J		45	24	KK	—	—	—	—	—	—	8	段	1
261 A	229		24	KK	—	—	—	—	—	—	4	段	1
261 B		40	25	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	1
261 C		29	24	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	1
261 D		39	21	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	1
262 A			21	KK	—	—	—	—	—	—	6	段	1
262 B			26	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	2
262 C		40	23	KK	—	—	—	—	—	—	5	段	2
270 A			32	MJ梵字「キャ・カ・ラ・バ・ア」	—	—	—	—	—	—	4	直	1
274 A	280	77	34	MJ「大安寺」	5	—	3	—	4	—	13	段	10
274 B		77	31	MJ「大安寺寶塔」	5	—	3	—	5	—	10	段	17

＜凡例＞

1. 略記号の意味は以下の通り。 T：単弁蓮華紋、HS：宝相華紋、F：複弁蓮華紋、S：珠紋、K：圏線・界線 、KK：均整唐草紋、HK：偏行唐草紋、KI：幾何学紋、KT：剣頭紋、MJ：文字紋、LV：線鋸歯紋。
2. 大安寺出土品が破片で、他の遺跡で良好な同笵資料がある場合、蓮子数・弁数・珠文数・線鋸歯紋数に関しては同笵資料での数を記したものがある。
3. 出土点数に関しては、平成12年度までの奈良市による大安寺旧境内の調査で出土した分のみカウントした。
4. 表に掲げた型式・種が特定できる資料の他、細片の為、型式・種が不明の軒丸瓦が126点、軒平瓦が59点ある。

印刷・製本仕様データ

表　　紙：アートポストカード220kg/㎡・マットpp加工
見 返 し：白色上質紙110kg/㎡
巻頭図版：特アート紙135kg/㎡
本　　文：白色マットコート紙90kg/㎡
本文ﾌｫﾝﾄ：ヒラギノ明朝体
製　　本：左開き・糸かがり綴じ

©2009 by the Nara Municipal Board of Education
No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成18(2006)年度

ISSN 1882-9775

印　刷　平成21(2009)年３月16日

発　行　平成21(2009)年３月27日

編　集　奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135　奈良市大安寺西二丁目281番地
TEL　0742－33－1821
FAX　0742－33－1822
URL　http://www.city.nara.nara.jp/
E-mail　maizoubunka@city.nara.lg.jp

発　行　奈良市教育委員会
630-8580　奈良市二条大路南一丁目1－1
TEL　0742－34－1111(代)

印　刷　株式会社　明新社
630-8141　奈良市南京終町三丁目464番地

この冊子は、300部作成し、1部当たりの印刷経費は3,347円です

ISSN 1882-9775

ANNUAL RESEARCH REPORT

OF

ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA

2006

CONTENTS

Ⅰ PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2006.

Ⅱ REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SIENCE.

Ⅲ REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS IN 2006.

Ⅳ BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCHCENTER OF NARA CITY.

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,

2009

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHEOLOGY IN NARA CITY AREA
2006

NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2009